

# 茂利・宮の西遺跡

(主)中柏原線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

平成22(2010)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会





多可郡多可町中区茂利字宮の西

# 茂利・宮の西遺跡

(主)中柏原線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

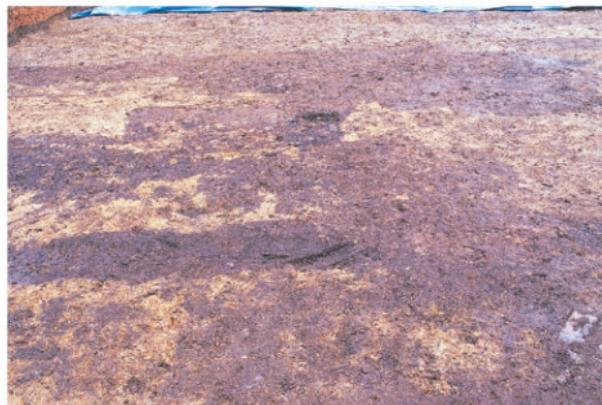


平成22(2010)年3月

兵庫県教育委員会







B区 遺構検出状況( 東から )



B区 SK14( 東から )



B区 土坑群( 南から )



C区 井戸



C区 井戸断面状況



C区 全景



出土遺物

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県多可郡多可町中区茂利所在の「茂利・宮の西遺跡(しげり・みやのにしいせき)」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 茂利・宮の西遺跡の全面調査は、(主)中柏原線道路改良工事に伴い、兵庫県社土木事務所(当時)の依頼によって、平成8年度および9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(当時)が実施した。
3. 本報告書作成にかかる整理作業は、(主)多可柏原線県単独道路改良事業として兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所の依頼を受け、平成20・21年度に兵庫県立考古博物館が実施した。
4. 本報告書掲載の地形図は、図版1は国土地理院、図版2は旧多可郡中町、図版3は旧社土木事務所作成のものを使用した。その他の実測図は調査担当者および嘱託職員によるものを使用した。
5. 遺物写真は(株)タニグチ・フォトに撮影を委託した。写真図版1の航空写真は国土地理院発行のものを使用した。その他の写真は調査担当者によるものである。
6. 木製品の樹種同定は株式会社古環境研究所に依頼し、第6章に分析結果を掲載している。また、鉄造関係遺物の分析は兵庫県立考古博物館 岡本一秀により、エネルギー分散型蛍光X線解析装置を用いてを行い、第5章に分析結果を掲載している。
7. 本報告書は、前川悦子の補助の下、別府洋二が編集した。
8. 発掘調査、整理作業に際して以下の方々の指導・助言を受けました。  
記して感謝いたします。(順不同、敬称略) 宮原文隆、安平勝利、岸本一郎、小川真理子、内田俊秀。



## 目 次

第1章 調査の経緯	1
第2章 遺跡周辺の環境	3
第3章 遺構	7
第4章 遺物	11
第5章 鋳造関係遺物の分析	21
第6章 兵庫県茂利・宮の西遺跡における樹種同定	23
第7章 まとめ	27

## 表 目 次

表1 茂利・宮の西遺跡における樹種同定結果	24
表2 遺物観察表	37
表3 周辺の遺跡	

## 挿 図 目 次

挿図1 X線透過写真	22
挿図2 実体顕微鏡写真	22
挿図3 スペクトル図	22
挿図4 茂利・宮の西遺跡の木材	25

## 図 版 目 次

図版1 周辺の遺跡	
図版2 遺跡周辺の地形 昭和61年)	
図版3 調査地区	
図版4 A区遺構配置図	
図版5 A区遺構図	
図版6 B区遺構配置図	
図版7 B区遺構図	
図版8 C区遺構配置図	
図版9 井戸( S E 1 )	
図版10 遺物 A区出土土器 1	
図版11 遺物 A区出土土器 2、石製品、鉄製品	
図版12 遺物 A区出土鋳型 1	
図版13 遺物 A区出土鋳型 2、炉材 1	
図版14 遺物 A区出土炉材 2	
図版15 遺物 B区出土土器、石製品、鉄製品	
図版16 遺物 B区出土鋳型、炉材 1	
図版17 遺物 B区出土炉材 2	
図版18 遺物 C区出土土器、木製品	

## 巻頭カラー写真図版目次

- カラー写真図版 1 A 区 SK 2、SK 10埋土内遺物出土状況、A 区南半部  
カラー写真図版 2 B 区 B 区遺構検出状況、SK 14、B 区土坑群  
カラー写真図版 3 C 区 井戸、井戸断面状況、C 区全景  
カラー写真図版 4 出土遺物

## 写真図版目次

- 写真図版 1 遺跡の位置（航空写真）  
写真図版 2 遠景、A・B 区調査前の状況  
写真図版 3 A・B 区全景、A 区南半部遺構検出状況  
写真図版 4 A 区全景、A 区全景と B 区、SD 1・2・3  
写真図版 5 SK 6、SK 7・8・9、SD 4 と SK 6～9  
写真図版 6 SK 2 棟出状況、SK 2 土層断面、SK 2  
写真図版 7 SK 1、SK 3、SK 4 棟出状況  
写真図版 8 SK 10、SK 10 内遺物出土状況、SK 5 土器出土状況  
写真図版 9 B 区全景、B 区調査状況  
写真図版 10 SD 5・6 棟出状況、SD 5・6 調査状況、SD 5・6  
写真図版 11 SD 5 堆積状況、SD 5 下面焼土坑、SD 5 下面焼土坑断面  
灰釉陶器碗出土状況、焼土塊出土状況、土師器出土状況  
写真図版 12 SK 8、SK 12～17 棟出状況、SK 14 周辺遺構検出状況  
写真図版 13 SK 14 棟出状況、SK 14、SK 14 灰釉陶器碗出土状況  
写真図版 14 SK 12、SK 12・13、SD 7  
写真図版 15 C 区調査前の状況、確認調査状況、下層の状況  
写真図版 16 C 区全景、遺構検出状況  
写真図版 17 掘立柱建物、柱穴の断面  
写真図版 18 土坑、溝、井戸  
写真図版 19 井戸、井戸断面状況  
写真図版 20 井戸断面状況、井戸最下層の状況、井戸完掘状況  
写真図版 21 出土遺物 A 区の土器 1 写真図版 22 出土遺物 A 区の土器 2  
写真図版 23 出土遺物 A 区の土器 3、B 区の土器 1 写真図版 24 出土遺物 B 区の土器 2  
写真図版 25 出土遺物 B 区の土器 3、鉄製品 写真図版 26 出土遺物 石製品  
写真図版 27 出土遺物 C 区の土器、木製品 写真図版 28 出土遺物 A 区の鋳型 1  
写真図版 29 出土遺物 A 区の鋳型 2 写真図版 30 出土遺物 A 区の鋳型 3  
写真図版 31 出土遺物 A 区の鋳型 4 写真図版 32 出土遺物 B 区の鋳型 1  
写真図版 33 出土遺物 B 区の鋳型 2 写真図版 34 出土遺物 A・B 区の炉材  
写真図版 35 出土遺物 B 区の炉材 写真図版 36 出土遺物 A・B 区のスラッグ

## 第1章 調査の経緯

兵庫県社土木事務所( 当時 )による( 主 )中柏原線道路改良工事が多可郡中町( 当時 )茂利において計画された。この道路は、国道427号線と旧国鉄鍛冶屋線跡に敷設された町道( 稲屋中村中央線 )を結ぶ東西の路線である。

この地域には茂利・宮の西遺跡、丸山遺跡、茂利・大將軍遺跡、富山地池遺跡、安坂・城の堀遺跡などの縄文時代から中世後半までの遺跡が広がっているが、遺跡の範囲などはまだ未確定のものが多い。対象地は茂利・宮の西遺跡の南東部にあたっており、同遺跡の範囲に含まれるものと考えられた。

のことから、平成8年10月と11月に確認調査があこなわれ、国道427号に取り付く西端部では溝や焼土が検出され、平安時代後期頃のものとされる土師器やスラッグが出土した。そこでこの範囲の水路を境界としてA・B区と分けて平成9年度に全面調査を実施している。

確認調査では、つづく東側の部分では駐車場等に利用されていたため削平が著しく、遺構は検出されていない。さらに東側の部分では、石組みの井戸や柱穴が検出された。このため平成8年度にこの地区を全面調査 C区することとなった。この地区で確認された遺物包含層は同一水田内で東へと続くことがわかったが、地形が傾斜しており、遺構は広がらないことが推測された。さらに東側の確認グリッドでは現耕土下に砂疊層が検出され、旧河道または氾濫原と推定され、遺跡範囲外とされた。

二度にわたる確認調査と同年度内の平成9年1月には、道路改良工事の進捗状況に対応して、C区の全面調査( 遺跡調査番号 960409 )を実施した。積雪のある時期の直接執行による調査であったが、8日間で約200m<sup>2</sup>の調査を実施し、確認調査で検出された石組み井戸や掘立柱建物が検出された。井戸の底から出土した板材には「銀應二年」の記年銘墨書が確認されている。

A・B区の全面調査( 遺跡調査番号 970217 )は平成9年6月から7月にかけて、梅雨による降雨に悩まされながら実質5日間で約330m<sup>2</sup>の調査を実施した。弥生時代後期から近世までの遺構・遺物が検出されたが、耕土・床土直下で検出され、上面の削平が著しいものと考えられた。溝や土坑などが検出され、鋳型片や炉材が出土した。

今回報告する茂利・宮の西遺跡の調査は、以上のように確認調査を含めても実質15日間の期間で行っているが、紀年資料の出土や鋳造に関連する遺物・遺構が検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができた。

平成20・21年には出土遺物の接合・補強・復原・保存処理、分析や遺物実測・写真、レイアウト、トレース等の整理作業を行い、報告書を作成した。

調査担当者等

平成8年度

確認調査

遺跡調査番号 960351

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 企画調整班 鈴木敬二

期間 平成8年10月18日

調査面積 約38m<sup>2</sup>

確認調査

遺跡調査番号 960341

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 矢野治巳

期間 平成8年11月22日

調査面積 約23m<sup>2</sup>

全面調査

遺跡調査番号 960409

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 矢野治巳

調査第2班 森内秀造、高木芳史

期間 平成9年1月20日～29日

調査面積 約200m<sup>2</sup>

平成9年度

全面調査

遺跡調査番号 970217

担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第1班 別府洋二、高木芳史

期間 平成9年6月30日～7月16日

調査面積 約330m<sup>2</sup>

平成20年度

整理作業

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第1班 別府洋二

整理保存班 森内秀造、岡田章一、岡本一秀

吉田優子、大前篤子、藤井光代、長瀬重美

平成21年度

整理作業

担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第2班 別府洋二

整理保存班 森内秀造、岡田章一、篠宮正、岡本一秀

前川悦子、西口由紀、又江立子

## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

茂利・宮の西遺跡は、兵庫県多可郡多可町中区茂利字宮の西に所在する遺跡である。多可町は平成17年に多可郡加美町・中町・八千代町が合併して誕生した町で、中区は旧多可郡中町にあたる。

多可町は、兵庫県のほぼ中央部に位置しており、旧播磨国の中東部にあたる。北には旧但馬国の中河内郡(現朝来市生野町)や、旧丹波国の大水上郡(現丹波市青垣町・氷上町・山南町)と接している。また、南には西脇市や加西市、西には神崎郡神河町・市川町が位置している。

中町(現中区)は北が旧加美町、旧氷上郡山南町に、東は旧多可郡黒田庄町(現西脇市)に、西は旧八千代町に、南は西脇市に接した位置にある。

中町(現中区)の周辺部は、北端にそびえる妙見山(標高692.6m)をはじめとした山塊に囲まれてあり、その中央部を加古川の一級支流である杉原川が北西から南東へ貫流し、流域にいくつかの単位の谷底盆地を形成している。その平野部は、上流から北部平野・中央平野・安田平野と呼称されている。

茂利は、杉原川と思出川が合流した南西部に広がる「中央平野」に位置し、西から比較的緩やかな傾斜の丘陵から、現在では多くの溜池を形成している小谷地形の扇状地、および段丘で形成された平地にかけての地域である。平野部は地形的に東に向かって緩やかに下っており、国道427号、旧国鉄銀治屋線(1990年廃止、元播州鉄道、現在県道139号)旧道がほぼ南北に並行して走っており、旧道周辺の中村町は旧中町でももっとも繁華した地域である。中村町は段丘から、杉原川による自然堤防や旧河道にあたると思われる。

この中村町は、元禄4(1691)年の奥中村区有文書によると、「中村町ト申ハ、先年二百年ばかり以前、御公儀様より道筋へ出シ候様にと仰せ付けられ候」とあり、奥中・茂利の村から新たに中村町が設けられたらしい。この奥中・茂利・中村・徳畠の近世村が、中世の安田荘中村郷の範囲となるものであろう。多可郡安田庄は中町の北西部をのぞいたほぼ全域を占めていたものと考えられる。

酒米や播州織が有名なこの地域であるが、古くから和紙の産地として知られていた。中町から杉原川を源とする加美町(現加美区)で現在も作られている杉原紙は、古くから相原庄紙として都などにおいて高値で取引されており、贈答品として用いられていた。この杉原紙を中心とした流通には、丹波を経て京へと向かう陸路や加古川の水運が利用されていたものと推測される。

また、中町の北にそびえる妙見山の周辺には、生野銀銅山に連なる生野層群が分布しており、鉱山や多くのカラミが堆積した製錬址が知られており、遅くとも中世後半には製錬がおこなわれていた。

### 第2節 歴史的環境

中町(現中区)では旧石器時代の痕跡は見出されていない。続く縄文時代草創期に属する有舌尖頭器が3遺跡で発見されており、茂利の富山地帯遺跡②からも見つかっている。早期の遺物も6遺跡から見つかっており、思い出遺跡③など平野部でも見られることから、谷底盆地地形はこの段階で大略、形成されていたことが推測される。

遺跡の数が急激に増加するのは弥生時代中期後半になってからである。この時期には北部・中央・安

田の平野部のみならず、山頂や谷の奥まった位置にも集落が営まれているが、多くの集落は次の時期までは継続しない。その中で北部平野の思い出遺跡③と中央平野の安坂・城の堀遺跡④は後期以降にまで継続しており、各平野部における拠点集落の存在として捉えることができよう。他の多くの遺跡と異なり、中期中葉から集落が営まれ始めたことも、母村としての存在を示している。続く庄内期に入ると遺跡数は増加するが、古墳時代まで継続する集落はやはり思い出遺跡③と安坂・城の堀遺跡④の拠点集落に限られる。両集落は古墳時代でも断続はあるものの集落として継続し、さらにその後も当該地域の中心地として存続する。

中町域では前・中期の前方後円墳や前方後方墳は見られず、また古墳の数も少ない。この時期の古墳の中で発掘調査が行われた岡山1号墳⑤は方墳で、竪穴石室4基が検出されている。

古墳時代後期から終末期にかけては、各平野の縁辺部や谷を瀬った奥まで古墳群が見られるようになる。前・中期古墳が集中していた中央平野でも茂利古墳群⑥や安坂古墳群⑦などが営まれるが、規模の大きな古墳は見られない。

この時期に多くの古墳群が分布するのが北部平野の北縁、妙見山の南麓を囲むように広がる妙見山麓古墳群である。この時期の中町域の古墳の7割以上がここに含まれている。妙見山麓古墳群は18の古墳群を総称した名称であるが、その中でも東山古墳群⑧は、墳丘や石室の規模、副葬品などからこの地域をまとめた首長クラスが築造した古墳群とされている。なお11号墳からは铁滓が出土している。

7世紀中葉～後半に創建された多哥寺⑨は四天王寺式伽藍配置をもつことが調査によって判明しているが、この北縁からは8世紀後半の梵鐘鋳造遺構が見つかっている。寺域の東にひろがる思い出遺跡⑩や鋸治屋遺跡⑪からは大型の掘立柱建物や円面鏡が出土しており、官衙的な性格を有している。安坂・城の堀遺跡⑫からは奈良時代後半から平安時代初頭の木製祭祀具や墨書き土器が出土している。

和銅・靈亀年間(710年代)に成立したとされる「攝磨風土記」には託賀郡の里として、賀眉・黒田・都麻・法太が挙げられている。天平12(745)年の正倉院文書には賀美郷のほかに奈何郷が見られ、930年代に成立したとされる「和名類聚抄」には荒田・賀美・那珂・資母・黒田・蓑田の六郷が記されている。杉原川上中流域にあった賀眉郷が賀美・荒田・那珂の三郷に分立し、さらに下流域に資母郷が設けられたことが知られ、賀美・那珂・資母は杉原川の上・中・下流域をわけた分類呼称であろう。中町の名のもととなった奈何・那珂の郷は天平年間までに成立したものである。

平安時代には山の上や谷の奥まった位置に山林寺院と呼称される寺院が営まれるようになり、その最盛期は13～15世紀である。円満寺東の谷遺跡⑬からは鉄製品鋳造遺構と銅製品鋳造遺構が検出されている。また、西安田遺跡⑭では14～15世紀の梵鐘鋳造遺構とその下層から鉄製品の鋳造遺構が検出されている。また、牧野・町西遺跡⑮でも13世紀頃の鉄製品の鋳造遺構が検出されている。

平安時代の後半には、高田・中村・曾我部・安田・野間の五郷からなる多可郡安田庄が、当初は鳥羽院領としてあらわれるが、のち平氏や若狭局(平政子・高階栄子母・建春門院乳母)の荘園として伝領される。この中村郷には奥中・茂利・徳畠・中村が包括されていたと考えられる。

安田庄は文治2(1186)年に鎌倉武士の代官によって横領されていたことが知られており、建久3(1192)年には尊勝寺および蓮華王院の荘園となって後白河上皇寵妃丹後局高階栄子が領家となっている。建保年間(1213～)には青蓮院領となる。

承久の乱によって後鳥羽・土御門・順徳の三上皇および朝廷方の公卿・武士の所領が没収されているが、後藤基重のこの乱の宇治合戦行賞によって、承久3(1221)年に彼の後家の住む安田庄の曾我部・安田・中村の三か郷の公文職および長枝名田畠屋敷が安堵されており、以降、戦国期を除いて後藤氏がこ

の所職を相伝していく。承久年間以前から多可郡内に居住していたと思われる後藤氏の本拠は、同氏が建立し、永享2(1430)年に後藤基阿が同寺領別当職となった照明寺(延命寺)のあった曾我部郷にあったと考えられている。

後藤基重は、播磨守護後藤基清の実子であり、兄弟の基綱は鎌倉幕府の評定衆・引付衆となっている。また、基清の実父佐藤仲清は内舎人および摂政藤原忠通の隨身である。後藤氏・佐藤氏とも代々、院の北・西面武士や検非違使となるものが多く、もともと京都を主要な舞台として活躍する畿内武士であった。佐藤義満(西行法師)一族である。

正応6(1293)年には安田庄は九条家領となる。九条家の藤原頼頼、その子丹波国司惟方(寂信)は多哥寺を再興して量興寺を建立し、付近に量興寺領を有していた。また、惟方外孫は同寺別当となっている。

九条家は建武元(1334)年には後醍醐天皇から、同3年には足利尊氏からと、立て続けに安田庄五ヶ郷地頭職を安堵されているが、康暦2(1380)年には京都嵯峨野の宝幢寺に領家職半分を寄進している。また、九条家は応永10(1403)頃には天台門跡寺院の青蓮院内法輪院に安田庄五ヶ郷を、永享3(1431)年には中村郷半済分を十輪院地薦灯油領所に寄進している。

宝幢寺は足利義満が夢窓疎石高弟の春屋妙葩に帰依して建立した寺院で、寄進によって莊園内土豪層の横領を防ぐために將軍家の庇護を受けることを目的としている。しかしながら同年の宝幢寺春屋妙葩の書状には守護や代官が年貢を横領するので取り分がないとすでに見えている。応永29(1422)年には安田五ヶ郷のうち高田郷領家職を宝幢寺が知行し、残る四郷は九条家に返却している。ところが応永34(1427)年に高田郷の莊主が守護赤松被官、安田庄地頭平源太によって殺害され、下地横領されている。

後藤氏も播磨守護赤松氏の被官であり、安田庄を侵食した首謀者のひとつであった。後藤基景は歴応3(1340)年、赤松円心の城山城に供奉し、丹生城攻め、石柱城防衛などで軍功をあげている。また、観応元(1350)年、基景は赤松則祐配下として足利直冬討伐に向かっており、同年、安田・曾我部・中村の三ヶ郷の公文職を安堵されている。觀応2(1351)年には垂水伊川城、須磨城、神咒寺城、坂根、猪名野の合戦や、近くでは神崎郡大河内荘での戦いに参加している。この觀応の擾乱では、足利直義側の石塔頬房が陣を張る光明山(加東市)を、尊氏、高師直が囲んでおり、北播磨も主戦場となつた。以後、後藤氏はほぼ一貫して赤松方に与してあり、赤松氏の浮沈が大きく影響を与えており、嘉吉の乱(1441)によって赤松絶頬家が滅び、山名氏が播磨守護となった時期や、細川淡路守が安田庄の地頭職を知行した時期などの後藤氏の動静は知られていない。

一旦没落した赤松氏であるが、文明元(1469)年、赤松正則が播磨を回復して守護になると、その所司代浦上則宗から後藤基信に安田庄公文職が安堵されている。しかしながらその子後藤尚基は文明16(1484)年の山名政豊播磨侵攻の際の手落ちによって、同職を赤松政則によって没収されたが、長享3(1498)年にはまたその子の純基に譲っていることから回復されたものと思われる。またこの時期の文明10(1478)年に青蓮院領安田庄の代官職を赤松(在田)八郎太郎が請け負い、文明16(1484)年には多々良岐高重に代わっている。多々良岐は安坂に拠った土豪とされるが、その苗字から但馬の朝來郡の山名方の武将であったらしい。

さらに、赤松氏の権力を奪った浦上村宗の死後、天文6(1537)年、赤松政村から後藤与次郎に三ヶ郷の公文職が知行返付されていることから、一旦は公文職を失っていたことが知られる。

その後、播磨は尼子氏の侵攻、および赤松・浦上氏の争乱が続く。後藤与次郎は赤松晴政(政村)方につき、天文14(1548)年にも安田庄内三ヶ郷公文職を安堵されている。与次郎の子(基徳)孫(基真)は赤松晴政の子・孫に仕えていたが、天正6(1578)年、赤松則房が羽柴秀吉と和睦して阿波国に移った際に基

徳は神崎郡加納村へ蟄居、基真も父と行動をともにしたが、やがて神崎郡矢田部村、ついで山崎村に居を移し帰農したと伝えられている。

天正10(1582)年から当地は秀吉の蔵入地として直接支配を受け、慶長5(1600)年池田輝政の播磨入部、元和3(1617)本田忠政入部を経て、多可郡全域は寛永16(1639)年に天領となり、代官支配下に置かれる。山名氏の侵攻をはじめ、この地域が多くに戦乱に巻き込まれ、信長・秀吉が直接支配し、徳川幕府が天領とした理由には、この地が播磨・但馬・丹波の境界の交通の要衝にあったことと、生野銀銅山を控えた位置にあったことが挙げられる。石垣山遺跡<sup>④</sup>は安土桃山時代の製鍊遺跡である。

さて、現在の茂利を含む中村郷の公文職を代々継いできた後藤氏が中世のこの地域に大きくかかわっていたが、北播磨の戦国時代は、播磨國守護赤松範資の子朝範を祖とする在田氏も大きくかかわってくる。南北朝期に在田庄(現加西市)に派遣された赤松朝則が同庄を本願地として在田姓を名乗り、同氏は以降約200年にわたって北播磨の権益を握っていた国人となる。

嘉吉の乱によって赤松総領家が滅んだ際も在田氏は存続しており、赤松家が再興され、政則が播磨守護職を回復した際には在田氏が活躍したようである。ところが文明12(1480)年には在田則盛と赤松政則が合戦し、在田氏は敗れて没落する。その後、赤松一族の内紛と浦上氏の台頭のなか、在田氏の一部は山名氏と結ぶ。長享2(1488)年、復権した赤松政則によって在田家は分家の八郎太郎忠長が家を継ぎ、安堵される。

その後、北播磨各地の代官職を請け、得平氏、上原氏など地元土豪たちを併合して勢力を拡大するが、浦上村宗に城を落とされるなど播磨戦乱の只中にあり、永禄9(1566)年、別所氏によって本拠の野間表を取り詰められ、別所氏に併合されるようである。永禄11年には在田庄に退居している。

在田氏と安田庄との関係は、康暦2(1380)年に春屋妙葩の書状に在田氏が登場することや、文明10(1478)年に青蓮院内法輪院に安田庄五ヶ郷の代官職に在田八郎太郎が任じられたことなどで知られる。また、段ノ城は在田氏分家の八郎太郎家、霞ヶ城(森本城)<sup>⑤</sup>は後に在田氏に併合された得平氏が後藤氏の城郭と考えられている。安坂・城の堀遺跡<sup>⑥</sup>では15世紀までの遺物が含まれる堀で囲まれた構居跡が調査されており、茂利・宮の西遺跡とは卑近な位置にある。

#### [参考文献]

- 西脇市史編纂委員会 1982「西脇市史」
  - 中町史編集委員会 1991「中町史」
  - 中町教育委員会 2003「中町の遺跡Ⅱ」中町文化財報告30
  - 平凡社 1999「兵庫県の地名」『日本歴史地名大系第29巻Ⅱ』
  - 藤原孝三 1991「北播磨地方における在田氏の動静」『播磨・水尾城跡の調査と研究』
  - 西脇市埋蔵文化財調査報告書3 西脇市教育委員会
  - 岸本一郎 1996「中世後期の北播磨地方」「段ノ城と周辺の城館」「段ノ城遺跡」
  - 中町文化財報告13 中町教育委員会
  - 中町教育委員会 妙見山麓遺跡調査会 1986「播磨産銅銭の研究」
- ①～⑥は図版1に対応

## 第3章 遺構

### 第1節 A区の遺構

A区は現道に沿った南北に長い調査区で、3地区のうち、最も標高の高い位置にある。調査前の標高は約100.6mを測る。耕土・床土を除去した下面が所謂地山面となり、遺構が検出された。検出された遺構には、近世・中世・弥生時代のものが認められる。

#### 土坑

##### S K 1

S K 1は調査区の南西隅で検出された不整円形を呈した土坑で、底は2ヶ所に分かれる。炭・焼土(炉材を含む)を埋土中に含んでいる。須恵器小片が出土したのみであるが、中世に属するものと考えられる。

##### S K 2

S K 2は調査区南半部東寄りで検出された。直径1.5mを前後する不整円形を呈する土坑で、深さは10cmほどしか残存していない。底面も比較的の平らであった。鋳型・炉壁が大量に出土しており、内面にクロミを塗布した鍋の鋳型のほとんどがここからの出土である。遺構の状況からは不明であるが、鋳造土坑の可能性がある。土器はヘラおこしの残る須恵器片や土師器片が出土するのみであるが、中世に属するものと考えられる。

##### S K 3

S K 3は調査区中央南寄りで検出された楕円形を呈する浅い土坑である。遺物は出土していないが、埋土中に焼土ブロック・炭が含まれ、埋土のX線写真の結果、金属粒が含まれていることがわかった。この金属粒の分析結果は第5章で報告する。

##### S K 4

S K 4は調査区南端で検出された深さ5cm程度の楕円形を呈した土坑である。遺物は出土していないが、調査時に埋土を削ると銀白色に光ったことから、分析をおこなったところスズなどの金属が検出された。この土坑も鋳造関連の遺構と考えられるが、鉄製の鍋の鋳造にスズ等を用いるものは不明であるが、近辺の鋳造関連の遺跡では銅鉄兼業が主流であることから、この遺跡でもスズ等を含有した銅製品の鋳造も行っていた可能性が高い。

##### S K 5

S K 5は調査区南半部東寄りで検出された。柱穴状の土坑で、直径約50cm、深さ約33cmを測り、内部から弥生土器(1~6)が重なるように出土した。本調査区唯一の弥生時代の遺構である。

##### S K 6~9

S K 6~9は調査区中央部で接するように検出された土坑で、いずれも近世に属するものである。楕円形を呈した皿状の土坑で、埋土中には近世陶磁器(7~21)や石臼(S 1)、多量の礫が含まれる。S K 7には板石や瓦で蓋をした暗渠状の溝S D 4が取り付くことから、屋敷裏のごみ穴の可能性がある。鋳型・炉材・スラグも出土したが、混入であろう。

##### S K 10

S K 10は調査区北端で検出された。二段に掘り込まれており、下段の周囲に焼土や焼けた石が囲むよ

うに検出されたが、湧水のため詳細な調査ができなかった。鋳型・炉材・スラッグが出土しており、中世のものと思われる土師器皿片が出土している。溶解炉に関連した施設の可能性が考えられる。

## 溝

A区では数条の溝が検出されたが、いずれも近世以降のものである。

### S D 1

S D 1は東西方向に走る小溝で、他の遺構を切って掘られていることから、近代以降のものであろう。

### S D 2・3

S D 2・3は調査区南半部で検出された溝で、小溝であるS D 2は平行して南北に走るS D 3に合流して、S K 6へと向かう。両者の切り合い関係は不明瞭であることから、同一時期のものの可能性が高い。S D 3からは鋳型片・スラッグや須恵器杯片・土師器片も出土しているが、17世紀代の美濃焼(23)が出土している。

### S D 4

S D 4は前述のように暗渠状を呈し、S K 7へと向かう溝である。焼瓦の熨斗瓦(24)が出土している。

## 掘立柱建物

### S B 1

調査区南半部で検出された柱穴からS B 1を復元した。2間×2間以上の建物であるが、やや歪である。主軸方向は近世の溝とは異なる。S D 3の底で検出されたことから近世以前のものであろう。建物内部にS K 2が存在する状況を示す。

## 第2節 B区の遺構

B区はA区と水路を挟んだ東側に位置する。調査前の標高は約100.4mを測る。調査区は東へ緩やかに下る地形で、西半部は2基の柱穴状の遺構以外は水田に伴う暗渠などの落ち込みで、大きく削平されたものであろう。

## 溝

南北方向に走る溝が数条検出された。

### S D 5

S D 5は調査区に東端を走る溝で、北半部は溝底にさらに小溝が走る形状をもつ。幅は1.3~2.4mと北側が広くなる。深さは20cmほどである。溝の西側肩部に赤化した部分が見られ、高温の火を使ったものと見られるが、明瞭な遺構とはならなかった。溝埋土からは土師器鍋、備前鑄鉢、瀬戸・美濃系陶器や青磁・鋳型・炉壁・スラッグが出土している。中世に属するものであろう。

### S D 6

S D 6はS D 5と平行して西側を走る溝で、幅0.3~0.9m、深さ0.07~0.15mと北側の規模が大きくなる。北端部はこの溝に切られるような浅い落ち込みが見られる。須恵器碗(36)や土師器鍋片・青磁片や炉材が出土している。中世に属するものであろう。

### S D 7

S D 7は細長い形状であったため、当初溝としていたが、掘削したところ周辺の一連の土坑群と同様、

鋳造関連の土坑である可能性が高いものと思われる。南北長2.4m、幅0.55mを測り、南半部が0.35mと一段深くなる。埋土はブロック状を呈している。遺物は出土していない。

#### S D 8

S D 8は調査区南端から北進して、直角に東へ曲がる形状をもち、最大幅0.65m、深さ0.09mを測る。鍵状に屈曲した内側にはS K 12~17やS D 7が密集して存在するが、一部の土坑はこの溝と重複している。鋳型・炉材・スラグが出土しており、土師器皿小片や須恵器小片も出土している。

#### S D 9

S D 9は調査区のほぼ中央を途切れながら走る溝で、幅約0.5m、深さ約0.05mを測る。土師器皿小片が出土している。

### 土坑

S D 6の西側、S D 8に囲まれるように土坑群が検出され、埋土から鋳型・炉材・スラグが出土していることから、鋳造に関連した遺構と考えられる。

#### S K 12・13・15~17

S K 12・13・15~17は近接して掘られており、相互に切り合った状況を示している。形状も不整で、歪であることから、鋳造に関連した廃棄物を同一場所で幾度か埋めた廃棄土坑と思われる。ともに埋土中には炭や礫とともに、鋳型片・炉材・スラグなどが含まれている。出土土器は小片であり、図化できなかったが、糸切底部の須恵器や土師器鍋片が含まれていることから、中世に属するものと考えられる。

#### S K 14

S K 14は概長方形の平面形を呈しており、一方の長辺に沿って杭状の小坑が穿たれている。礫・鋳型・羽口などとともに瀬戸・美濃系灰釉平椀が出土している。他に土師器鍋片も出土した。

## 第3節 C区の遺構

C区はA・B区とはやや離れた地点にあり、地形的にはもっとも低い位置を占める。A・B区との間は、確認調査結果では削平されていると考えられており、本来は同一の集落跡であった可能性が高いものと考えられる。但し、A・B両地区で見られた鋳造関連の遺構・遺物はこの地区からは見つかっていない。

### 井戸

#### S E 1

S E 1は確認調査時に認められたもので、調査区の南東隅で検出された。石組みを持つものである。不整構円形の平面形を持つ掘り方は、長径約2.5m、短径約1.55mを測る。掘り方は徐々に狭まるが、ほぼ垂直に近く約2.1mの深さまで掘削され、底から直接円形に石を積み上げ、13段程度まで組み上げている。石材は直径30cm程度の自然石を主に用いるが、一部に割った痕跡が残る石材も認められる。石組みの隠れた部分に黒く焼けたような痕跡が見られる石材も確認できた。

井戸底はさらに0.3mほど掘り下がるが、水溜施設を埋設した痕跡であろう。石組みは、上面で直径0.7m程であるが、底部は直径約0.9mあり、底部が広い袋状になっている。

井戸底から曲物底板と考えられる木製円盤の破片が出土しており、その一面に「觀應二年」の墨書きが確認できた。

この他に、溝や柱穴が検出され、3間程度の掘立柱建物が建つと思われるが、明瞭に復元できなかった。



## 第4章 遺物

### 第1節 A区の遺物

#### A区出土の土器

1～6の弥生土器は、SK5から出土した。1は平底から内湾しながら立ち上がる体部をもつ鉢である。ナデによって仕上げてあり、口縁部は丸く收める。口径10.15cm、器高6.3cmと小型のものである。

2も鉢の口縁部と思われる。内湾し、丸く收める口縁部へ至る。内面にはハケが残されるが、横方向のナデで仕上げる。一部黒斑がみられ、外面は赤褐色を呈している。

3は小型の高杯あるいは台付鉢の杯部である。内湾しながら立ち上がり、口縁端部を外反させて丸く收める。内外面はナデを施した後、アラガキ状のミガキを施す。

4は櫛口縁部である。強く屈曲した頸部から短く外反し、外側に面を作りて上端を突出させる口縁部をもつ。

5は壺底部と思われ、丸く突出する底面には葉脈痕が残る。

6は脚台付鉢である。短い脚台に湾曲する体部が続く。製塙土器の可能性がある。

これらのSK5から出土した土器は6などの新しい要素が見られるが、弥生時代後期末頃のものであろう。

7～13の土器はSK6から出土しており、8が最上層から出土した以外は、2層以下の下層出土のものである。7は土師器焰熔である。残存部分はヨコナデ調整によって仕上げている。外面には煤が付着している。

8は外面に赤土部を塗布した陶器擂鉢で、口縁部上面に面をもつ。6条単位の櫛描きの卸し目を施している。

9は丹波焼擂鉢で、口縁部を上下に拡張して断面三角形を作る。内面に赤土部を塗布して7条単位の櫛描き卸し目を施す。17世紀代のものである。

10は内外面に赤土部を塗布した盤である。

11は丹波焼甌であり、口縁部は横方向に拡張している。接合できないが、環状の粘土を貼り付けて耳とした肩部の破片がある。

12も丹波焼火入れである。口縁端部を欠くが、平底から屈曲する体部へと続く。

13は唐津皿である。外面に灰釉を施し、底部内面は蛇の目状釉ハギ。外面の体部下半以下は露胎。17世紀後半から18世紀前半にかけてのものである。

14～18はSK7から出土した。14はロクロ成形の土師器皿で、底面に糸切痕が残る。

15は東播系須恵器鉢の口縁部である。口縁端部を上方へつまみ上げる。

16は唐津皿である。外面に灰釉を施し、底部内面に砂目跡が3ヶ所みられる。外面の高台脇以下は露胎。17世紀前半のものである。

17は備前焼鉢である。口縁端部は横方向に拡張して上面に端面をもつ。内面には赤土部を塗布している。底面にはヘラおこし痕が残る。

18は丹波焼甌であり、口縁部は横方向に拡張している。外面に灰釉を施し、外面は黒褐色に発色している。SK9出土の破片と接合できた。

- 19～21はSK9から出土した。19はロクロ成形の土師器皿で、底面に糸切痕が残る。
- 20は施釉陶器碗で、内外面に鉄釉を施した後、部分的に灰釉を施釉している。
- 21は肥前系染付磁器碗で、比較的高い断面台形の高台をもつ。
- 22はP10から出土した土師器皿で、ロクロ成形で、口縁端部は玉縁状に肥厚する。
- 23はSD3から出土した美濃焼の志野皿で、内外面に長石釉が施されている。平底の外周を削り残して低い高台を作っている。17世紀前半のものである。
- 24はSD4出土の煙瓦で、熨斗瓦である。
- 25は遺構検出の際に出土した無釉陶器鉢で、卸し目は見られないが、丹波焼擂鉢と思われる。片口がつくものであろう。内面にヘラ記号が見られる。この他に須恵質の布目瓦(54)などが出土している。

### A区出土の石製品

S1はSK6下層出土の粉挽き石臼の下臼である。凝灰岩質砂岩と思われる粒子の粗い石材を用いており、上面には溝が残るが、摩滅が著しい。使用によるものであろう。側面にも壓による成形痕が見られる。直径32cmを復原する。

S2はSK10出土の台石である。花崗岩の川原石を用いているが、上面、側面が平滑である。粒子の粗いピンク色の長石を含んだ花崗岩で、強い火を受けたためか、表面には細かいひびが入り、内面は風化が著しい。

S3はA区遺構検出中に出土した台石で、過半を失うが、板状の直方体を呈していたものであろう。石英質粒子の大きい花崗岩の川原石を用いている。表面には深さ1cm近い皿状のくぼみがあり、内面や周辺に赤褐色の物質が付着している。表面が赤化し、ひびや割れを生じていることから、強い火を受けたものと考えられる。

### A区出土の鉄製品

I1はSK2出土の板状を呈した鉄塊である。全体に丸みを帯びているため製品の一部ではないだろう。

I2はSK3出土の板状を呈した鉄片である。長方形の平面形を呈すが、両端部がわずかに薄くなり、鎧などの工具とはならない。

I3はSK6出土の釘である。角釘で、両端を欠くが、断面の一辺が0.3cmと比較的細く小型の部類に入る。直角に折れ曲がっている。

I4はA区遺構検出中に出土した角釘である。やはり両端を欠くが、断面の一辺が0.55cmと比較的太く大型の部類に入る。

### A区出土の鋳型

A区ではSK2・6・10などから土製の鋳型が出土している。

M1～M22および写真掲載のM39・40・42・43は、A区SK2から出土した鋳型である。すべてが同一の製品に伴う鋳型であるとして、湾曲面の度合いからかなり大型の製品が復原され、表面には凸帯をはじめとした紋様が一切見られないことから、鍋の鋳型と考える。SK2からは図化できなかったが、ヘラ切りの残る須恵器小片や土師器小片が出土しており、中世前半以降の時期が与えられるが、近世以降の土器は出土していない。

M1～M21は外型の破片である。モミやスサを多く混ぜ込んで焼成した円筒状の粗型の内側に真土を数

回塗り、おそらく換型技法で造型した内面にクロミを塗布したものである。クロミを塗布した鋳型はこの遺構以外からはM39がSK10から1点出土したに過ぎない。

M1～M9及び、写真掲載のM39・40は鋳込み面の表面に塗布したクロミが残存したものである。

M1はクロミが残存する部分が直線的に途切れ、その上方は粗型が外反する。真土も同様に外反する部分があることから、口縁部近くの破片と考える。クロミが直線的に途切れる部分の直径は約60cmを測る。

この部分が口縁端部となり、上方が内型を固定して納めるための幅置受けとなるか、この部分が口頭部となるか判断しがたい。垂直に対して約20度の角度で立ち上がる。写真に掲載したM41はSK10出土の小片であるが、約120度の角度で屈曲する2面にクロミが付着している。この破片が同じ鋳型の屈曲する口頭部として、体部が外傾する鍋であるなら、M1は体部上半から口頭部の鋳型であろう。

粗型には鋳型に対して横方向に混ぜ込んだスサやモミが頭著に観察できる。粗型の内面には真土を塗るために備えたものか、横方向にユビナデ状やさらに細い条痕状に表面を調整している。この他にM18は外反する粗型に真土を重ねた破片で、口縁部付近の可能性がある。

M2はクロミが残存した部分が、約150度の角度で屈曲するもので、底部付近の破片と考える。屈曲部で直径約50cmを復原する。横方向にスサを混ぜ込んだ粗型に少なくとも3層に分層できる真土を重ねている。クロミに近い内側の真土は非常に細かい粒度である。

M3はクロミが直線的に剥がれており、その部分でごくわずかに器表面が外側に屈曲している。粗型にはスサが多く含まれる。

M7～M9は粗型が残存せず、真土の表面にクロミが残存したものである。

M10～M13は、クロミは残存していないが、粗型上の真土の表面に鉄分が付着したものである。但しM10では残存する2面に、M13では接合面と考えられる面に鉄分が付着することから、鋳込み面を構成するものではないかもしれない。

粗型の状況が判別できるものにM19～M21がある。M19は表裏面と一側面が残存している。厚さ約4.6cm、幅8.2cm以上の粘土板の一面に断面図では他と異なり右側に薄く真土が残存している。外側にあたる面には一条に沈線を巡らせ、横方向のユビナデで仕上げている。

M20では厚さ約5.9cm以上、幅5.3cmの粘土板の一面に薄く真土が残存している。粗型の大きさはM19と大きく異なることから、部位によって粗型の厚さ、高さを変えていることがわかる。真土は接合面と考えられる上面にも付着しており、粗型の接合にも真土状の粘土を利用したか、真土を重ねる際に隙間に入り込んだものと思われる。

M21は粗型の外側の破片と思われ、真土の付着が見られない。

M22は上部が突出した鰐頭形の土製品で、最大径が10cm程度のものである。スサ・モミを含む粗型の表面に薄く真土が付着することから、内型の可能性があるが、鍋に伴うものではない。この他に、円錐台状の土製品(M46)や、円柱状土製品(M47)なども内型の可能性がある。胎土にはスサを含むが、真土に近く、表面には真土が付着している。

M23はスサ・モミを含む粘土で作られた棒状の土製品で、一側面が灰色を呈しており、高温で焼けている。これは「サレ」「三つ又」「三叉状土製品」などと呼ばれる、鋳型焼成の際に空気の循環、火の回りを良くするために用いられた「鋳型焼成用支柱」(註 伊藤他2004)であろう。B区出土のM32や写真掲載のM42～45、M59～61も同じ性格のものであろう。

M24・25はSK6出土の鋳型片である。ともに粗型の破片で、真土はみられない。SK6は出土土器から近世に属する遺構で、出土した鋳型は混入であろう。

M24は3面が残存しており、厚さ約5.3cmのやや湾曲したブロック状を呈している。上面は内外面に対して傾斜している。

M25は2面が残存したブロック状を呈したもので、胎土にはモミの痕跡がみられる。表面は橙色に焼成されるが、内部はオリーブ黒色を呈しており、火がまわっていない。

M26~28はSK10出土の鋳型片である。SK10からは土師器小片が出土しているが、図化できる土器はない。近世以降の土器は出土していない。

M26は板状を呈し、表面を花弁状に窪めている。緻密な粘土を用いており、表面は灰白色を呈し、高温を受けているが、真土と思われる橙色の細かい砂粒は裏面にのみ付着する。鍋吊耳部の鋳型か、別製品の鋳型の可能性があるが、他の鋳型の作りとは異なり、掘り込み部も精緻なものではない。

M27は真土で作られた厚さ約4.5cmのブロック状を呈しており、3面が残存する。3面とも強い火を受けており、一部には鉄分が付着している。

M28は粗型の表面に薄く真土が残存したもので、粗型の表面には横方向のユビナデ状の痕跡がみられる。

## A区出土の炉材

A区のSK1・2・6・7・10などから、溶解炉と考えられるスラッグが付着した土製の部材が出土している。

F1~F4は轆羽口である。その他に写真を掲載したF50(SK2出土)、F49(SK6出土)も羽口の破片である。F1~F3はSK10から出土した。

F1は内径8.6cmを復原する羽口の端部である。緻密な胎土の羽口の表面に真土状の砂粒の多い土を塗っており、炉本体に固定するのに真土状の粘土を用いていたらしい。外面にはスラッグが付着している。

F2~4は内径12~14cmを復原する円筒状の土製品で、表面のスラッグ以下全体が、真土状の胎土をもつことから、羽口本体が剥がれた接合粘土と考えられる。

F5~8はSK1出土の炉材である。

F5は焼成された直方体状、板状、蒲鉾状のブロックが重なった上にスラッグが付着したもので、一部には真土状の粘土がみられる。炉床附近を補修したものか。

F6~8は厚さ1.5~2cmほどの鉢状を呈したもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッグが付着している。砂粒の多い胎土である。

F11~14はSK6から出土した。

F11は細かい砂粒を含む胎土をもつもので、表面に灰黒色の気泡の多いスラッグが付着することから、炉床附近の破片と思われる。

F12は焼成されたブロック状を呈したもので、内面にスラッグが付着する。ブロックの厚さは約4cmを測る。胎土にはスサを含むが、比較的緻密である。

F13~14は厚さ1.8cmほどの鉢状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッグが付着している。砂粒の多い胎土である。

F15~18はSK7から出土した。

F15は焼成されたブロック状を呈したもので、一面に2層のスラッグが付着する。ブロックの厚さは約4cmを測る。胎土にはスサを多く含む。

F16~18は厚さ1.3~1.7cmほどの鉢状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッグが付着している。砂粒の多い胎土である。F16は鉢状の材が鈍角に接合している。

F 19~27はSK 10から出土した。

F 19~23は焼成されたブロック状を呈したもので、内面にスラッグが付着する。ブロックの厚さは2.2~3cmを測る。胎土にはスサを含むが、比較的緻密である。F 21・22ではスラッグ付着面と直交する面上に砂粒の多い粘土が付着しており、炉材であるブロックを接合する粘土であろう。

F 24~27は厚さ1.6~2.1cmほどの錫状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッグが付着している。砂粒の多い胎土である。

この他に、オリーブ色を呈し、胎状に流れたガラス質スラッグ、鉄錫状のスラッグや黒鉛化した炭化木材を含んだスラッグが、SK 1・7・10やP 10、SD 3から出土している。(写真図版36)

## 第2節 B区の遺物

### B区出土の土器

26はSK 14から出土した瀬戸・美濃系灰釉陶器平椀である。削り出し平高台を有し、体部が直線的に開く扁平なa類に分類でき、後期様式Ⅲ期(14世紀末から15世紀第2四半期頃)の時期のものである。(藤澤2001)。底部外面の中央を蛇の目状に浅く削る高台の底面には糸切痕が残り、高台から体部へは小さな段がつく。尖り気味の口縁部直下でわずかに屈曲して立ち上がる。内外面にはオリーブ色に発色する灰釉を施釉し、体部外面以下は露胎となりツケガケによるものであろう。内面に非常に細かい擦痕が認められ、茶筅を使用した可能性が高い。

27~37はSD 5から出土した。28・29・33・35はSD 5南端部から、31・32・36は溝下層から出土した。27は土師器皿と思われ、器壁の厚いものである。

28・29は土師器鍋である。非常に硬質に焼成されており、窯によって作られたものであろう。播丹型に分類されるもので、平行タタキを残した肩の張らない体部から直立し、端部を外方に拡張する口縁部をもつ。28は内面に当具痕が残る。

30~32は瀬戸・美濃系灰釉陶器楕である。30は平椀で、削り出し平高台を有し、体部が直線的に開く扁平なa類に分類でき、後期様式Ⅲ期(14世紀末から15世紀第2四半期頃)の時期のものである。(藤澤2001)。底部外面の中央を蛇の目状に浅く削る高台の底面には糸切痕が残り、高台から体部へは小さな段がつく。尖り気味の口縁部直下でわずかに屈曲して立ち上がる。内外面にはオリーブ色に発色する灰釉を施釉し、体部外面以下は露胎となりツケガケによるものであろう。底部内面には5ヶ所に目跡が見られる。

31も楕の底部である。削り出し平高台の底部外面の中央を蛇の目状に浅く削る。内面には灰黄色に発色する灰釉を施釉し、外面は露胎となる。

32も楕の底部である。削り出し平高台で、底部外面に糸切痕を残す。内面には灰オリーブ色に発色する灰釉を施釉し、外面は露胎となる。

33は瀬戸・美濃系灰釉陶器卵皿である。平底から緩やかに外上方に立ち上がる。底部外面は回転ナデ調整が施されており、糸切痕は消されている。内面にはヘラ状工具で格子状に卵目を刻む。内面の一部に淡黄緑色の灰釉施釉。外面は露胎。15世紀代のものである。

34は備前焼擂鉢底部である。内面に8~9条の卵目を施す。

35~37は龍泉窯系青磁皿である。35・36は外反気味に外上方に伸び、輪花状に成形した口縁部をもつ。端部は丸く收めている。16世紀代のものである。

38はS D 6出土の須恵器椀で、重ね焼痕が見られる。

39～41は包含層から重機掘削時や遭構検出時に出土した。39は土師器の擂鉢である。直線的に外方に伸びる口縁部で、端部直下外面は強くナデにより窪ませる。内面には横方向の細かいハケ調整の後、縦方向の節目を部分的に刻む。外面には煤が付着している。

40は須恵器椀で、直線的に広がる口縁部外面端部には重ね焼痕が見られる。

41は土製の面子である。円形に成形されて、硬質に焼成される。文様などは見られない。

## B区出土の石製品

S 4はS D 9西側の落ち込みから出土した砂岩質の砥石である。断面三角形の楔形を呈しており、1面を使用している。農作業に伴う粗砥であろう。

S 5はS D 5から出土した砥石である。S 6はB区遭構検出中に出土した砥石で、両者は接合できないが、同一個体の可能性が高い。非常に目の細かい赤褐色の泥岩質の石材を用いており、使用面は非常に平滑である。仕上げ砥である。S 5では2面を使用しており図上縦方向の細かい擦痕が見られる。S 6では図上横方向に擦痕や太く溝状を呈する使用痕が見られる。表面や一部の破面が黒化しており、火を受け割れたものと思われる。

## B区出土の鉄製品

I 5はS D 5北端部の落ち上層から出土した。薄い板状を呈しており、一側辺が山形を呈する。その下方には直径0.6cmの円孔が抜けており、円孔の周囲がわずかに盛り上がる。鋳造品であるなら鉄鍋吊耳の可能性を考えている。

I 6はS D 5北端部の落ちの下層から出土した角釘である。断面が0.85×0.3cmと扁平であるが、小型のものである。

I 7はS D 5北端部の落ち上層から出土した角釘である。下端部を欠損するが、断面の一辺が0.5cmと比較的大きい。頭部は平たく叩き伸ばし、巻き込むように折り曲げて作り出している。

I 8はB区の重機掘削およびその後の精査時に出土したから犁先片である。風呂部側面の破片で、側面は鋭角に立ち上がり刃部を作る。

## B区出土の鋳型

B区からはS K13、S K14検出中、S K16・17の他にS K12・15、S D 5・8などから鋳型片が出土している。A区と比べて点数も少なく、鋳込み面にクロミを塗布したものもみられない。

M29はS K13から出土した。焼成された厚さ3.4cm以上のブロック状を呈したもので、鋳込み面は欠損する。外面は円弧を描いている。上面から一部外面に薄く真土状の粘土が付着するが、接合粘土であろう。胎土にはスサ・モミを含む。

M30・31はS K14検出中に出土した。胎土にスサ・モミを含み、焼成された厚さ5.1cmおよび4.7cmのブロック状を呈したもので、鋳込み面は欠損する。外面は円弧を描いており、M31では直径28cmを復原する。M31の上面に薄く真土状の粘土が付着する。

M32～34はS K16から出土した。

M32はスサ・モミを含む粘土で作られた棒状の土製品で、一側面が灰色を呈しており、高温で焼けている。鋳型焼成用支脚であろう。

M33は焼成された厚さ4.5cm以上のブロック状を呈したもので、鋳込み面は欠損する。外面は円弧を描いている。胎土にはスサ・モミを含む。

M34は円盤状の一面の外周が高くなっている、一見、大形土器底部の破片状を呈す。外底面の直径約33cm、立ち上がりの最大外径約38cm、内面の屈曲部径約26cm、内面の残存最大径約28cmを測る。内部底面は鋳型外底面から約15度の角度をもち、立ち上がりはさらに約135度の角度をもつ。スサ・モミを含む胎土で、内面には細かい砂粒が付着する。外面には強い二次焼成がみられる。平底に近い丸底で、底径26cm程度を復元する鉄鍋などの底部鋳型であろう。

M35-37はS K 17から出土した。

M35は焼成された厚さ5.3cmの板状のブロックで、外周は欠損するが、一部に直径5.4cmの円孔が残る。一面には0.5cmほどの厚さに真土を塗っており、一部は円孔にかかる。もう一面には不定方向の条痕状の調整が残る。スサ・モミを含む胎土である。この円孔は、湯口である可能性も考えられたが、二次的な火を受けた痕跡はなく、挽型技法で造型する際の挽板の回転軸を立てるための孔であろう。製品を鋳込む際には円孔部にも真土が充填されていたのであろう。円孔の中心から残存する外端までは約14cmを測り、直径28cm以上の製品が復原される。

M36・37は胎土にスサ・モミを含み、焼成された厚さ4.9cmおよび4.55cmのブロック状を呈したもので、鋳込み面は欠損する。外面は円弧を描いており、M36では直径28cmを復原する。M36の下面に薄く真土状の粘土が付着する。M36の胎土中にはガラス質スラッゲ片が含まれている。

## B 区出土の炉材

F 28～F 31は鶴羽口である。その他に写真を掲載したF 51(S K 16)、F 53・54も羽口の破片である。F 28はS K 12から、F 29はS K 14検出中に、F 30はS D 5から出土した。

F 28・29・31は内径12～13cmを復原する円筒状の土製品で、表面のスラッゲ以下全体が、真土状の胎土をもつことから、羽口本体が剥がれた接合粘土と考えられる。

F 30は羽口の端部である。スサの少ない緻密な胎土の羽口の外面にスラッゲが付着している。厚さは2.5cmまでを測る。

F 32～34はS K 13から出土した。

F 32・33は厚さ1.8～2.1cmほどの鶴状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッゲが付着している。砂粒の多い胎土である。

F 34は焼成されたブロック状を呈したもので、内面にスラッゲが付着する。ブロックの厚さは約3.2cmを測る。胎土にはスサ・モミを多く含む。

F 35はS K 15から出土した。厚さ1.6cmほどの鶴状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッゲが付着している。砂粒の多い胎土である。

F 36～39はS K 16から出土した。

F 36はスサ・モミを含む胎土をもつもので、表面に厚いスラッゲや鉄分が付着する。羽口付近の破片であろうか。

F 37・38は外湾する形状で、スラッゲ、鉄分が厚く付着する。羽口に近い部分であろう。

F 39は厚さ1.2cmほどの薄い鶴状を呈するもので、湾曲する内側長辺にガラス質のスラッゲが付着している。砂粒の多い胎土である。

F 40～42はS D 6から出土した。

F 40は細かい砂粒を含む胎土をもつもので、内面に気泡の多い多孔質のスラッグが付着することから、炉床付近の破片と思われる。

F 41は焼成されたブロック状を呈したもので、内面にスラッグが付着する。胎土にはスサを含むが、比較的緻密である。スラッグ付着面と直交する面に細かい砂粒の粘土が付着する。

F 42は砂粒の多い胎土の一部に、舌状にスラッグが付着したもの。次のS D 8出土のF 43も同様の形状である。

この他S K 12・15、S D 5・8などからスラッグが出土している。(写真掲載S L 6~17)ガラス質のものや鉄鑄に覆われたものがあり、一部には焼土や炉材と思われる部が含まれている。わずかに磁性を有するものもみられる。

## 第2節 C区の遺物

C区から出土した遺物は少なく、井戸(S E 1)および、井戸が掘削されたクロボク状の包含層から土器小片が、井戸から木器が出土したにすぎない。A・B区から多く出土した鋳造関係の遺物は見られない。

### C区出土の土器

42は井戸(S E 1)から出土した土師器皿の小片で、口縁端部はヨコナデ調整によって尖り気味に仕上げる。

43~51は井戸(S E 1)南の包含層から出土した。

43は古式土師器あるいは弥生土器の脚部片と思われる。脚端部を上方に拡張している。

44~46は土師器皿である。すべて非ロクロ成形で、底部と体部の境界が不明瞭なものである。45には煤が付着しており、灯明皿として用いられたものであろう。

47は土師器鍋である。内傾して内湾する口縁直下外面に低い鈎がめぐる。体部外面には横方向の平行タキが施されている。插磨型鍋に類似するが、器壁が厚い。

48は須恵器皿あるいは楕の口縁部片である。外反気味に広がる口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。

49・50は須恵器碗底部で、糸切痕を残す低い平高台をもつものである。

51も須恵器碗底部であるが、平底で糸切痕が残る。

### C区出土の木器

木器はC区の井戸(S E 1)から出土している。

W 1は井戸の底から出土した曲物底板である。直径約18.5cmを復原する円盤で、厚さ0.8cmの目の細かい針葉樹の板目板を用いている。円弧部分の側面には、一方(墨書のある面)に近い偏った位置に直径0.15cmほどの非常に小さい目釘孔が2ヶ所見られ、木製の目釘が1ヶ所残る。側板との結合のためのものであろう。加工痕は、裏面に顯著で、細かく面を作り加工している。

表面には墨書が見られるが、墨が失われ、その部分が白く盛り上がって残っている。2行にわたって10文字程度が読み取れるが、1行目は過半が失われ、訛読できない。2行目には「觀應二年」の年号を記した4文字が読み取れる。

文字が外周の円弧によって切られていることから、もともと木筒或いは木札状であったものを再加工し

て曲物にしたものであろう。一文字の大きさが2cmを超えるものもあり、文字が比較的大きいことや、墨のあたっていない部位の木材が瘞せていることから、外に置かれていたものであろう。

ちなみに、觀応2年(1351年)は足利尊氏・義詮が、直義の党である桃井直常、山名時氏、石塔頼房等の諸将との拮抗に敗れて、京を捨て丹波から播磨へと走り、多可郡付近を通過した年にあたる。

W2は井戸S E 1の掘り方埋土から出土した曲物底板である。直径約22cmを復原する円盤で、厚さ0.9cmの目の粗い針葉樹のやや斜めに木取した柾目板を用いている。側面の直線的な部分には目釘孔が3ヶ所見られ、0.4×0.3cmの断面方形の木製の目釘が2ヶ所残る。目釘孔は深さ1.5cmまで彫られる。底板を繋いで一枚にしたものであろう。表面の加工痕は残存しないが、裏面は角がよく取れしており、面には細い直線的な刃物傷が残る。作業台やまな板などに再利用したものであろう。

写真を掲載したW3からW6も井戸(S E 1)から出土している。

W3は曲物底板と考えられ、厚さ約1cmの目によく詰まった針葉樹の柾目板を円盤状に加工した一部である。

W4は曲物底板と考えられ、厚さ約0.8cmの目の粗い針葉樹のやや斜めに木取した柾目板を円盤状に加工した一部である。円弧部分に目釘孔二ヶ所が観察される。

W5・6は付け木或いは松明片である。幅1cm、厚さ0.5cmまでの細長い材で、目によく詰まった針葉樹を用いている。加工痕はなく、割り裂いた端材であろう。一端が焼け焦げている。

#### [参考文献]

- 五十川伸矢 1990「古代・中世の鋳鉄鋳物」『中・近世における東国と西国』  
国立歴史民俗博物館研究報告第46集 国立歴史民族博物館
- 五十川伸矢 2005「日本中世鋳鉄鋳物伝世資料一覧(1)鍋釜」  
『日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究』中間報告
- 伊藤幸司・松尾信裕他 2004『CS86-20次調査』『大阪城下町跡II』(財)大阪市文化財協会
- 神崎 勝 1993「梵鐘の鋳造遺構とその変遷」『考古学研究』第40巻 第1号 考古学研究会
- 鍛柄俊夫 2003「村の鋳冶師と町の鋳冶師」『戦国時代の考古学』高志書院
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』第8回研修会資料
- (財)枚方市文化財研究調査会・枚方市教育委員会 1999『田中家鋳物工場跡』枚方市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1998『白水遺跡第4次埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1996『真福寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第19集
- 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 2000『宮ヶ谷遺跡・長坂谷遺跡・円満寺東の谷遺跡・西安田遺跡』  
兵庫県多可郡中町西安田遺跡群調査報告II
- 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 1998『円満寺東の谷遺跡』中町文化財報告18-1
- 中町教育委員会 2005『牧野・町西遺跡III』中町文化財報告33
- 中町教育委員会 2003『中町の遺跡II』中町文化財報告30
- 加美町教育委員会 2004『岩座神光寺遺跡』加美町文化財報告9
- 伊藤喜久男 1985『16世紀の瀬戸・美濃窯』『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 岡田章一 2003『時期設定と土器・陶磁器組成の変遷』『兵庫津遺跡II』兵庫県文化財調査報告第270号
- 藤澤良祐 1995『瀬戸古窯址群III-古瀬戸前期様式の編年』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

- 藤澤良祐 1995「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 藤澤良祐 1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター  
設立5周年記念シンポジウム資料集 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

## 第5章 鋳造関係遺物の分析

### 1はじめに

茂利・宮の西遺跡のS K 3の埋土の中に金属光沢のある粒が認められた。このため、土壤を持ち帰り、分析を行った。

### 2 試料の選別

採取された土壤の中に金属が交じっているのか確認するため、採取された土壤のX線透過撮影を行った。

#### X線透過撮影

X線透過撮影は、(株)リガク製RF150-Tを使用した。測定条件は、電圧60kV、電流2mA、測定時間は1分である(挿図1)。

透過撮影した土壤サンプルの画像を観察したところ、透過度の低い球状の粒が数粒認められたため、ピンセットで採取した。採取した物だけを再度X線透過撮影を行い、目的とする試料であることを確認した。

### 3 試料の観察と分析

#### 実体顕微鏡観察

採取した試料を実体顕微鏡で観察し、デジタルカメラで記録を取った。使用した装置は(株)ニコン製SMZ-1500である。この後、純水に浸け、超音波洗浄機を用いて周囲の余分な土を除去し、再び実体顕微鏡で表面を観察した。挿図2は、試料2の洗浄後の写真である。

#### 法量の測定

採取したサンプルの直径と重量の測定をした。

試料番号	直径 (mm)	重量 (g)
1	2.1	0.0106
2	2.2	0.0097
3	2.6	0.0172

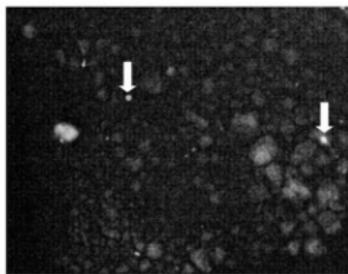
#### 蛍光X線分析

その後、蛍光X線分析装置で含有する元素の定性分析を行った。装置は、スペクトロ社製MIDE-X-Mを使用した。測定条件は、電圧45kV、電流0.25mA、測定時間は180秒、コリメータ径2.0mmで測定した。検出器はベルチェ冷却SSD(液体窒素冷却不要)である。定量分析は、装置付属のソフトにより標準試料を用いないファンダメンタル・バラメーター法で半定量分析を行った。このため、数値は参考値であるため、今回は掲載しない。

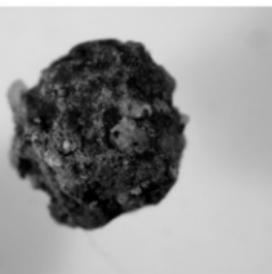
### 4 分析結果と考察

分析の結果得られたスペクトル図は、挿図3である。上のスペクトルが試料1、下のスペクトルが試料2である。両者の結果は、ほぼ同様で鉄(Fe)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、錫(Sn)、鉛(Pb)の元素が検出された。鉄のスペ

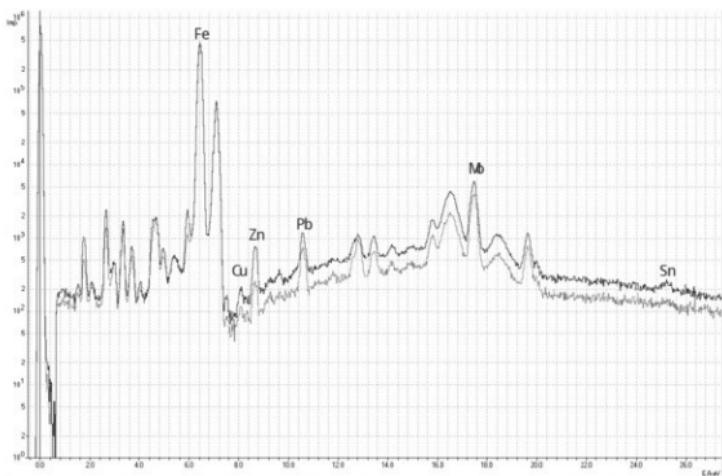
ケトル値が最も高いが、周辺の土に由来するものと考えられる。微量ながら検出された銅、亜鉛、錫、鉛については、茂利・宮の西遺跡で操業されていた鋳造業の実体を解き明かす手がかりになるものと考えられる。今回は客観的な観察の報告であるが、粒状物質の採取された土坑の性格も含めて、さらに検討を加える必要がある。



挿図1 X線透過写真



挿図2 実体顕微鏡写真（約16倍）



挿図3 スペクトル図

## 第6章 兵庫県茂利・宮の西遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

### 1.はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2.試料

試料は、茂利・宮の西遺跡より出土した曲物の底3点、付け木1点の計4点の木材である。

### 3.方法

試料のうち、木材はカミソリを用いて試料の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4.結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図4-1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高ぐらいである。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌である。耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

#### ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図4-2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、1分野に2個存在するものがほとんどであるが、型は不明瞭で、痕跡をとどめるのみである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ属に同定される。ヒノキ属には、ヒノキとサワラがあるが、本試料は分野壁孔

など不明瞭な点が多いことから、ヒノキ属の同定にとどめる。

## 5. 所見

同定の結果、茂利・宮の西遺跡の木材は、ヒノキ3点、ヒノキ属1点であった。ヒノキは木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。ヒノキ属にはヒノキとサワラがあり、サワラはヒノキには劣るが木理通直、肌目緻密であり、水質によく耐える材である。ヒノキ、サワラは温帯に分布する針葉樹であり、遺跡周辺に生育していたか、地域的な流通によってもたらされたと考えられる。

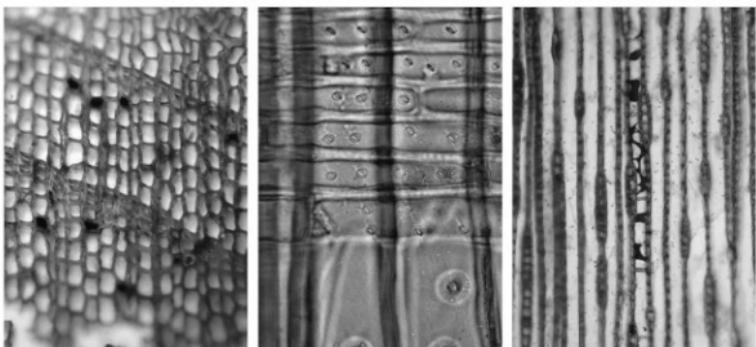
### [参考文献]

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 植生史研究特別第1号、  
植生史研究会 p.242

表1 茂利・宮の西遺跡における樹種同定結果

登録No	種別	器類	遺構	層位	結果(学名 / 和名)	
W 1	木器	曲物の底	S E 01	井戸の底	<i>Chamaecyparis obtusa</i> End. ヒノキ	
W 2	木器	曲物の底	S E 01	井戸の掘方埋土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> End. ヒノキ	
W 3	木器	曲物の底	S E 01	井戸の掘方埋土	<i>Chamaecyparis</i> ヒノキ属	
W 6	木器	付け木	S E 01	井戸の掘方埋土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> End. ヒノキ	

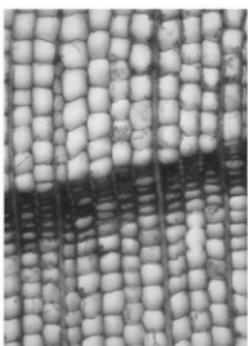
挿図4 茂利・宮の西遺跡の木材



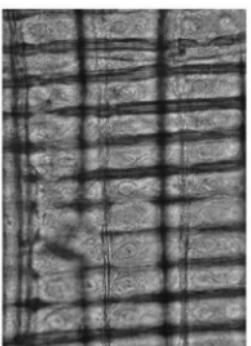
横断面 ━━━━ : 0.2mm  
1. W4 付け木 ヒノキ

放射断面 ━━━━ : 0.05nm

接線断面 ━━━━ : 0.2nm

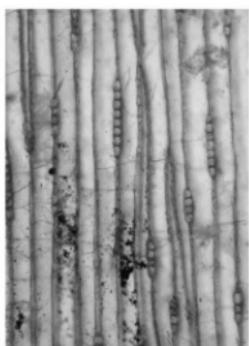


横断面 ━━━━ : 0.2mm  
2. W3 曲物の底 ヒノキ属



放射断面 ━━━━ : 0.05nm

接線断面 ━━━━ : 0.2nm





## 第7章 まとめ

- 茂利・宮の西遺跡では、短い調査期間であったにもかかわらず、多くの知見を得ることができた。
- 1、弥生時代後期の集落の一部が西側に広がっていることが推測できること。
  - 2、「觀応二年 鎧木簡の出土により、14世紀中頃以降にも井戸を伴う集落が営まれていたこと。
  - 3、その集落からやや離れた場所に鋳鉄鋳物の工房が営まれ、鉄鍋などを作っていたこと。
  - 4、その工房あるいは集落本体に中国製の青磁や瀬戸の施釉陶器が持ち込まれたこと。
- などが挙げられる。以下に、鉄鍋の鋳造について、及び中世瀬戸施釉陶器について若干考察する。

### 第1節 鉄鍋について

A・B両地区で出土した鋳造に関する遺物では銅に関するものが含まれず、鋳鉄鋳物を製作していたものと考えられるが、分析結果からも銅鉄兼業工房であった可能性も考えられる。

#### 1、鋳型について

##### A区出土の鋳型

A区SK2出土の鋳型のうち、表面にクロミが塗布された外型から復元される製品は、かなり大型のもので、表面に紋様をもたないことから、鍋・羽釜の鋳型の可能性が高い。また、羽釜に見られる口縁部の凸帯や鰐・獸脚にあたる鋳型の破片は見られないことから、鉄鍋を鋳造していたものと考えられる。

SK2から出土した鋳型のなかで大きさが復原できるものでは、M2が約150度の角度で屈曲し、その部分の直径が約50cmと復元される。この部分は底部から全体にかけての部分であろう(羽釜であったなら肩部の可能性もあるが)。また、M1では部位は不明だが部分的にしか真土が残存していないため、内型を固定して納めるための幅置受けとなる可能性もある)。粗型は径の大きいほうへ向かって外反しており、口縁部の可能性が考えられる。口縁部であるなら水平に対して約70度の角度でひらき、口縁部直径約60cmを復原できる。少なくとも胴部最大径が60cmを超えるものであろう。この両者が同一個体であるなら、底径50cm、胴部最大径或いは口縁部径60cmの大型の鍋が復原できる。

また、写真に掲載したM41はSK10出土の小片であるが、約120度の角度で屈曲する2面にクロミが付着しており、口縁部の屈曲部の可能性がある。この他にM18は外反する粗型に真土を重ねた破片で、口縁部付近の可能性がある。

この他、鋳型焼成用支脚(M23)が出土している。内型と思われるもの(M22・46・47)も出土しているが、小型もので、鍋に伴うものではない。また、吊耳の鋳型と考えられるもの(M26)が出土している。他の鋳型と異なる粘土を用いており、硬く焼成されている。「いけこみ」技法により外型に埋め込まれたものであろうか。

スサやモミを混ぜ込んだ粘土を断面が方形あるいは台形状に成形し、ドーナツ状に繋いだものを作る。この際、粘土を転がしたためか、スサ・モミが横方向に揃うものが多い。縦方向の分割を示すような破片は見出せなかった。厚さ4~5cm前後の粗型ブロックの表面には条痕やユビナデ痕が残り、特に粗型の内面には真土を塗るために備えたものか、横方向にユビナデ状やさらには細い条痕状に表面を調整している。表面にはスサ・モミ痕はあまり残らない。表面だけは別の粘土を重ねたのかもしれない。

この段階で一旦焼成している。表面は赤褐色に酸化炎焼成されているが、内面は黒褐色で熱が及んでいないものもある。

完成した外型の粗型の高さは部位によって異なるようだが、10cmを超えるものがある。粗型相互の接合には真土に類した細かい砂粒を含む粘土が用いられている。おそらく真土を粘土水で溶いたものであろう。粗型の内面に真土を塗り、挽板を回転させて成型したと考えられる。真土は3層に分層できるものがあり、粒度が徐々に細くなる。真土の厚さは部位によって大きく異なっており、0.9~2.8cmまでの差がある。最後に鉛込み面にクロミを塗布する。

### B 区出土の鋳型

B 区から出土した鋳型は、前述の A 区出土の鋳型同様、スサ・モミを混ぜ込んだ厚さ 5 cm 前後のプロック状の粗型を用い、粗型相互の接合には真土状の粘土を用いている。クロミを塗布したものはないことから鉛込み面が不明で、内型の可能性も残すが、内型は通常残りにくいくことから、外型としている。

また、真土表面による鋳型の内面を残すものも少なく、復元できる径が 28cm までで、A 区出土のものに比べて小さい。直径が 18~20cm ほどの小型の製品が復原できる破片もある。円盤状の形状をもつ M34 は、底部の鋳型と考えられ、底径 26cm の製品が復元できる。

M35 では挽板回転軸受けの孔が残っており、挽型技法によって鋳型の外型を成型していたと判断される破片である。M35 では直径 28cm 以上の製品が復原できる。

複数の製品の鋳型が存在した可能性が高いが、B 区出土の鋳型は A 区出土の鉄鍋鋳型と比べて小型の鍋などを作っていたのである。鉄鍋とすれば通有の大きさであるが、さらに小型のものは製品名が不明である。この他、鋳型焼成用支脚( M32・59~61 )が出土している。

## 2、鋳造工房の時期

鋳造関連の遺構には、A 区の SK1~3・10、SB1 と B 区の SK11~17、SD5~8 などがあるが、各などのような機能を有していたかは不明である。SK2 が円形を呈し、鋳型の破片が多く出土したことから、鋳造土坑である可能性が高いが、定盤の痕跡などは確認できなかった。A 区と B 区の鋳造関連遺構は約 15m 離れているが、一連の工房の可能性が高く、相前後した時期に稼動していたものであろう。

これらの遺構のほとんどに図化できない大きさの土師器片や須恵器片が含まれ、中世前半までのものと思われる。鋳造関連の遺構が掘削された以前の遺物であろう。これは C 区で検出された井戸が中世前半の包含層を切り込んで掘削されていることと同じ状態である。この時期の集落の状況は不明である。

鋳造関連の遺構には 16 世紀より新しい時期の土器は含まれておらず、14 世紀から 16 世紀までに機能したものと推測できる。

17 世紀以降にも土坑などが掘削されるが、鋳造関連の遺構とは明らかに埋土等が異なり、一旦断絶があり、集落の性格も異なったものになったものであろう。

## 3、兵庫県内出土の鉄鍋

兵庫県内の遺跡の調査でも、14 世紀頃から鉄製の鍋の出土がみられるが、いずれも破片であり、全容のわかるものは少ない。鉄製品は再利用・再生産に用いられることが多いため、出土数も限られるので

あろう。本遺跡でも鉄鍋吊手耳と考えられる破片が出土しているが、製品として使われていたものか、鉄素材としてあったのかは不明である。

「福田片岡遺跡（たつの市）」は、14世紀には溝で区画された館や寺があったと想定されている。内径約25~27cmを復原する鍋A、把手（30cm幅）や鉄製小釜（底径5cm程度）。その蓋（直径5~6cm）、茶釜蓋（直径約16cm）などが出土している。

「中尾城跡（三田市）」からは、16世紀前半頃の鍋Bが出土している。復元径24.0cmと25.3cmのものである。

「宮内堀脇遺跡（豊岡市出石町）」は山名氏の居城、此隅山城の麓の堤を伴う武家屋敷である。15世紀末から16世紀末頃の鉄鍋（口径約63cm）、脚をもつ鍋C（口径約26.3cm）や、口径約29.6cmの鍋、吊手耳、把手（幅22.5cm）が出土している。

15世紀の大型の鍋Aが出土した「福西砦（美方郡新温泉町村岡）」、上脇遺跡（神戸市西区）や、「宝林寺北遺跡（たつの市）」でも鉄鍋片が出土しており、近隣では「円満寺東の谷遺跡（多可町中区）」から破片が多数出土している。ここの中ものは内直径18cm以下と小型のものが多い。

出土した鉄鍋類は、宮内堀脇遺跡のものを除くと、ほとんどが口径20~30cm程度で、同時期の土師器鍋・羽釜と同じ大きさである。

丹波・播磨では中世全般に煮炊具として土師器が一般的であり、該当時期の遺跡からは必ずといっていいほど出土している。また、この時期以降、土師器鍋でも窯で焼成された硬質のものがみられ、耐久性が高まっている。本遺跡出土の土師器鍋も硬質のものである。丹波・播磨では寺院や城、居館では鉄鍋がかなり広まっていたことが伺われるが、同時にそれを補完するようにやや性能を高めた土師器鍋も用いられており、また、一般的な集落では土師器鍋が普遍的に用いられていた。但馬の例ではあるが、守護大名家老級の屋敷では15世紀末以降、煮炊具としては鉄鍋のみを使用しており、土師器鍋は用いていない。鉄鍋は、上位の階級から採用・波及していることが窺われ、土師器鍋を駆逐しつつあるが、一般階級では土師器鍋を用い続け、近世には焙烙鍋へと変化する。その頃には調理する対象などの変化があったのかもしれない。

茂利・宮の西遺跡出土の鋳型から復元できたような大型の鉄鍋の出土は少ないが、山名氏の家老級の屋敷跡と考えられる宮内堀脇遺跡出土のものは口径63cmに及ぶものである。大阪城下町跡のO S 86-20次調査で出土した口径約67cmに復原できる鍋Aの鋳型などに匹敵する。やはり上位の階級に伴うものであるが、各地の寺社などに伝世する鉄鍋・羽釜にも大きなものがあり、風呂に伴うものや、神事に用いられたものも含まれてあり、用途が特殊化するのであろう。

#### 4、旧多可郡域の铸造関連遺跡

旧多可郡内では多くの铸造関連の遺構や遺物が見つかっている。その嚆矢は「多哥寺遺跡（多可町中区）」で見つかった8世紀代の梵鐘铸造遺構2基である。

「牧野・町西遺跡（多可町中区）」第4区では、13世紀に鉄鍋や羽釜の鋳鉄物が生産されている。鍋A鋳型が6個体以上出土した。これは口縁部が屈曲し「Z」状をなすもので、屈曲部の径30cm前後、高さは約22cmのものがある。また、鍋B鋳型は、口径約23cm、器高15cm以下のものである。さらに最大径25~29cmの羽釜の鋳型も出土している。この遺跡から出土したガラス質滓の金属学的分析では、多可郡域内鈴山の銅滓との共通性、銅铸造を行った溶解炉を搬入して使用した可能性や、鋳物師は銅鉄兼業職人で、

河内銅物師の一派が出吹きしたものと考えられている。

「西安田遺跡(多可町中区)」では、14~15世紀代の遺構の上層では青銅製梵鐘の鋳造を、下層では明確ではないながらも鉄製品の鋳造が行われた。下層でも梵鐘あるいはそれに類する大型製品が鋳造されたと推定されている。

「円満寺東の谷遺跡(多可町中区)」は、12世紀末から16世紀はじめの中世寺院跡である。ここから14世紀後半の銅製品の鋳造遺構と鉄製品鋳造遺構(小銀冶)が見つかっている。銅滴、焼土、製品として塔木煙、八稜鏡、鉄鍋、羽口、カラミ、鉄塊などが出土し、寺院に関わる様々なものを生産していた可能性が考えられている。

「段の城上段遺跡(多可町中区)」は15世紀第4四半期~16世紀第3四半期頃の標高400mを超える山城である。ここでの調査で銅合金に使われた坩堝や、銅生産及び鉄に関わる鉱滓が出土している。

「清水・タカアゼ遺跡(多可町加美区)」13~14世紀のものと近世末以降の2基の梵鐘鋳造遺構が検出されており、雲門寺に伴う出吹きと考えられている。

「岩座神光寺遺跡(多可町加美区)」は、14世紀前半~16世紀後半頃盛期を迎えた山岳寺院の坊院群である。ここから17世紀後半~18世紀前半の梵鐘鋳造土坑が見つかっている。また、近くに銅鉱山が存在することも指摘されている。

西脇市の「鹿野宮ノ前遺跡」は、塙を巡らせた居館址である比延前田遺跡に近接した住吉神社を含む遺跡である。ここから梵鐘鋳造遺構が検出された。おそらく住吉社の神宮寺に伴う梵鐘で、寺伝などから15世紀代あるいは17世紀中頃の時期が考えられている。

## 伝来品および文献資料

加西市万願寺町の東光寺の梵鐘の刻銘には、觀応元(1350)年多可郡安田庄(現多可町中区)にあった禅光寺の鐘として鋳造されたが、宝徳3(1451)年には多可郡八幡庄の熊野三所権現、文祿4(1595)年には賀西郡万願寺の鐘となったことが記されている。

また、多可郡誌によると重春村高松山長明寺(西脇市)の元和9(1623)年の梵鐘銘に「多可郡之内中村之町 銅物師 大工 信濃守仲仙 九郎兵衛尉 藤原朝臣昌盛 同大工仲仙宗衛門 藤原朝臣家次同大工 高田村九良左衛門 藤原朝臣家次」とあり、中村に仲仙姓の銅物師がいたことがわかる。

播磨鑑には、「長明寺縁の源賴政に依頼されて京で四十八燈を作った銅物師が、賴政を頼って今の西脇に移り住み、多くの鐘を作った。高松山長明寺の梵鐘も其一である。今、子孫は多可郡中村に移って家業をなしている。」と記されている。

以上の資料から、多可郡域では8世紀の多哥寺遺跡を除いても、13世紀から18世紀までの多くの鋳造関連の資料が見られる。遺跡の調査からは、そのほとんどが銅製品と鉄製品両方に関わった、銅鉄兼業の銅物師であったことがわかった。多くの例が寺院内や寺域周辺、あるいは城館内やその周辺といった場所に鋳造遺構を築いていたことから、その多くは出吹き(出職)であろうが、その遺跡数の多さ、數百年にわたって連続と活動が認められることや梵鐘などの大型品をも製作できる技術力から、一定の銅物師一派がこの地域に拠点を置いて活動していたものと考えられる。西脇市長明寺梵鐘に名を残す仲仙家(中山家か)もその一派であった可能性が高い。

では、その銅物師一派はどのような素性をもつ者達であったのか。ひとつには妙見山中腹に残される鉱山の採掘坑や製錬場に見られるような、金属生産に伴ってこの地に移り住んだ技術者集団が考えられ

るが、現在のところ、銅の採掘・製鍊遺跡の調査では中世末までしか遡れていない。

次に播磨を中心とした鋳物師の動向を見てみよう。

## 5、播磨の鋳物師

鋳物師については、その研究が進んでいる梵鐘から窺うことができる。梵鐘の銘文から鋳物師の出自、系譜が推測されており、同じくその一族が鉄塔婆や鉄湯釜、鉄湯船も作るなど、大型の鋳鉄鋳物も手掛けていることが知られている。

播磨における鋳物師のことは平安時代から記録に見え、鎌倉時代には播磨鍋の名で有名となる。その名称が室町時代以降では野里鍋とかわって、その産地が姫路市野里であったことがわかる。

野里鋳物師の作とみられる鎌倉時代の梵鐘はなく、南北朝時代になって現れる。野里鋳物師の代表的な芥田家は、16世紀の中頃に夢前川河口の弁隨家から売地を買得するなど、勢力をひろげ、永禄11年(1568)には野里村鋳物師惣官職および播州国中鋳物師惣官職を許される。以後、累代姫路藩主に奉仕し、手厚い庇護を受けている。

野里より一步先に滝野の鋳物師が、延慶2年(1309)年 播州佐伯寺鐘(現三木市慈眼寺)に伊豆宗友の名を残しており、以後15世紀末頃の宗重まで比較的長期間活躍している。室町時代中期以降には梵鐘を残していない。この他、近隣では淡河、細川の鋳物師が知られている。

全国的に最も有名な鋳物師の集団である河内鋳物師の一派も西撰に拠点をもつようになる。河内鋳物師は河内国丹南郡を中心に居住しており、朝廷廬人所から「灯籠作手」と称する特権が与えられていた。

河内鋳物師とその系譜にのる鋳物師は鎌倉時代、全国に製品を残している。14世紀後半には河内鋳物師の多くは祖先の地を離れてさまざまな地に移り住む。河内鋳物師の代表的な氏族である丹治氏は、南北朝時代には摂津兵庫に移り住んでいる。

多可郡を中心に活躍した鋳物師は、鉄鍋や羽釜、梵鐘など大小の鉄製品や銅製品の鋳物を製作し、その多くは地元の寺院などの注文製作であった。但し、牧野・町西遺跡で量産が確認された鉄鍋や羽釜などは水運や陸上交通にのって商品として流通したことは、想像に難くない。おそらく「播磨鍋」と呼ばれたものの一部はこの地で生産されたものが含まれるのであろう。

その後、野里鍋と呼ばれたように、より海側の山陽道や瀬戸内航路が利用できる野里鋳物師にその主力を奪われるようになるのであるが、野里鋳物師は商業圏の買収、同業者との争論、為政者からの特権の付与と庇護などを経て、江戸時代を通じてその勢力を誇った。それは16世紀中頃以降のことと思われる。但し多可郡の鋳物師は17・18世紀に入っても梵鐘を作っており、依然としてこの地域で活躍している。

最も近い滝野鋳物師は14世紀初頭に活動が見られ、時期的には多可郡域で活躍した鋳物師と重複する。但し、滝野は同じ加古川流域とはいえ加東郡であり、郡域を越えるような活動を行いたかは不明であり、滝野鋳物師が移動した痕跡を示すものは見出せない。

播磨鑑に記されているように、京の都から移り住んだ鋳物師を示す資料は他には見当たらない。今の多可町中区中村町に江戸時代にいたとされる鋳物師が自分の先祖のことをそう語っていたのかもしれない。茂利の地と中村町は距離的に非常に近く、この周辺に鋳物師集団の拠点があったのであろう。その立地は加古川の河川交通を利用した流通拠点立地型の面もあるが、原燃料立地型の可能性が高く、周辺の鈴山の開発が13世紀以前まで遡るものと思われる。

茂利・宮の西遺跡の地で鉄鍋を作っていた職人は、名もない一人であったかもしれないが、ブランド

となった播磨鍋を作り、それとともに銅鉄兼業の鋳物師であった可能性が高い。彼らも多可郡一帯で梵鐘などを作り続けた鋳物師集団の一員であったのであろう。

## [参考文献]

- 五十川伸矢 1990「古代・中世の鋳鉄鉄物」『中・近世における東国と西国』 国立歴史民俗博物館研究報告第46集  
国立歴史民族博物館
- 五十川伸矢 2005「日本中世鋳鉄鉄物伝世資料一覧(1 梵釜)」  
『日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究 中間報告』
- 伊藤幸司・松尾信裕他 2004「GS86-20次の調査」『大阪城下町跡II』(財)大阪市文化財協会
- 神崎 勝 1993「梵鐘の鋳造遺構とその変遷」『考古学研究』第40巻 第1号 考古学研究会
- 鍛柄俊夫 2003「村の鋳冶師と町の鋳冶師」『戦国時代の考古学』高志書院
- 坪井良平 1984「鎌倉時代の梵鐘鋳造師」『歴史考古学の研究』
- 坪井良平 1976「梵鐘」学生社
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982「梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題」第8回研修会資料
- (財)枚方市文化財研究調査会・枚方市教育委員会 1999「田中家鉄物工場跡」枚方市教育委員会
- 神戸市教育委員会 1998「白水遺跡第4次埋蔵文化財発掘調査報告書」
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1996「真福寺遺跡」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第19集
- 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 2000「宮ヶ谷遺跡・長坂谷遺跡・円満寺東の谷遺跡・西安田遺跡」  
兵庫県多可郡中町西安田遺跡群調査報告Ⅱ
- 西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 1998「円満寺東の谷遺跡」中町文化財報告18-1
- 中町教育委員会 2005「牧野・町西遺跡III」中町文化財報告33
- 中町教育委員会 2003「中町の遺跡II」中町文化財報告30
- 中町教育委員会 1995「多哥寺遺跡」中町文化財報告 9
- 中町教育委員会 1997「多哥寺遺跡II」中町文化財報告15
- 中町教育委員会・妙見山麓遺跡調査会 1986「播磨産銅史の研究」
- 中町役場 1995「中町史」
- 多可郡 1923「多可郡誌」1985年復刻 臨川書店
- 加美町教育委員会 2004「岩座神神光寺遺跡」加美町文化財報告 9
- 西脇市教育委員会 2004「鹿野宮ノ前遺跡・比延前田遺跡」西脇市文化財調査報告書第14集
- 兵庫県教育委員会 1990「福田片岡遺跡」兵庫県文化財調査報告第94冊
- 兵庫県教育委員会 2008「宮内堀脇遺跡I」(財)兵庫県文化財調査報告第365冊
- 兵庫県教育委員会 1988「中尾城跡」兵庫県文化財調査報告第67冊
- シンポジウム「中世諸職」実行委員会 2002「中世諸職」
- 佐々木稔編 1996「いま、見えてきた中世の鉄」『季刊考古学』第57号 雄山閣出版
- 佐々木稔編 1997「古代・中世の銅生産」『季刊考古学』第62号 雄山閣出版
- 兵庫県立考古博物館 村上泰樹、岸本一宏からはスラッグ、鋳型などの金属製鍊や鋳造に関して多くの指摘を受けた。

## 第2節 濑戸灰釉陶器平碗について

茂利・宮の西遺跡では調査範囲はさほど広くなく、出土遺物も鋳造関係遺物を除くと非常に少ない。その中で、中世瀬戸窯産の陶器、灰釉平椀4点、卸皿1点の出土が注目された。兵庫県内の中世の遺跡の調査では、稀に瀬戸・美濃系陶器の卸皿や天目茶碗が出土することは経験的にあったが、灰釉平椀が複数出土することは稀である。周辺の多可町中区、加美区や兵庫県内の事例を概観する。

茂利・宮の西遺跡のある多可町中区では茂利・宮の西遺跡以外に5遺跡で出土が見られる。

「円満寺東の谷遺跡」は、12世紀末から16世紀はじめの中世寺院である。ここからは古瀬戸系施釉陶器平椀が2点、天目茶碗も出土している。但し、輸入陶磁の出土も多く、約530片、165点が図化されている。ほとんどが11世紀中頃～14世紀中頃のものであるが、内陸の山林寺院とはいえ輸入陶磁の流通圏として、瀬戸内沿岸の居館や寺院遺跡と遜色ないことがわかる。

「貝野前遺跡」は、山城である貝野城の館跡とされており、15～16世紀の遺物が出土している。瀬戸・美濃系施釉陶器では、灰釉平椀3点、盤(折縁深皿)1点、卸皿2点、仏花器1点が出土しており、居館址からも複数の瀬戸・美濃系施釉陶器が出土している。

その他、茂利・宮の西遺跡の近隣でも、「思い出遺跡」から古瀬戸編年後I期(14世紀末～15世紀初頭)灰釉平椀が出土している。また、「税屋・稻荷遺跡」(田野口・鎧町遺跡)からも、灰釉平椀が出土している。

多可町加美区の「岩座神光寺遺跡」は、14世紀前半～16世紀後半頃に盛期を迎える山岳寺院の坊院群である。ここからは、13世紀前半～後半の古瀬戸灰釉四耳壺、瓶子や青白磁梅瓶。14世紀前半の瀬戸瓶子、卸皿や青磁碗(無紋龍泉窯系)、白磁碗(口禿)。14世紀後半の天目茶碗や青磁碗(雷文、蓮弁文)。15世紀前半の天目茶碗。15世紀後半の天目茶碗や青磁碗(細線蓮弁文)。16世紀後半～17世紀初頭の天目茶碗が出土している。総計すると瀬戸・美濃系陶器では、天目茶碗8点、楕2点、皿、卸皿、壺、瓶子各1点が出土、中国製磁器では、青磁碗15点、白磁碗5点、同皿1点、青白磁梅瓶1点が出土している。各期に瀬戸・美濃系陶器と中国製磁器の両者が器種などをそろえており、古瀬戸の古い段階の摄入の一例や、末期には瀬戸・美濃系陶器が歴史的に凌駕する状況が見て取れる。

多可町内では、瀬戸・美濃系施釉陶器の出土が目立っており、かなり古い段階からもたらされていることや、灰釉平椀が出土した遺跡も複数見られることがわかった。そのほとんどが寺院跡や居館跡である。さらに範囲を広げて、丹波や摂津における瀬戸・美濃系陶器の出土状況をいくつかの遺跡を概観してみる。まずは杉原川を下って本流の加古川流域を概観する。

西脇市の「比延前田遺跡」は、加古川左岸に築かれた14世紀から16世紀後半にかけての堀を巡らした居館跡である。ここからは灰釉碗底部1点、灰釉丸皿2点、仏花瓶1点や、青磁碗3点、白磁碗1点、染付碗2点が出土している。

同じく西脇市の「野村構居」も、加古川をさらに下った右岸に接して築かれた14世紀から16世紀後半にかけての堀を巡らした居館跡である。ここからは天目茶碗1点、灰釉皿3点や、青磁碗2点、青磁香炉、染付が出土している。

多可郡の南西部、加西市の「有馬遺跡」は、14世紀後半から16世紀前半の堀で囲まれた居館跡である。ここからは瀬戸・美濃系陶器の水滴1点、天目碗1点と、青磁碗1点が出土しており、灰釉碗は見られない。

西脇市は旧多可郡に属しており、比延前田遺跡から灰釉椀底部が出土しているが、野村構居跡からは天目茶椀と皿が出土し、灰釉椀は見られない。一部のみの資料であるが、加古川の河川交通を通じては、瀬戸・美濃系灰釉陶器椀の流通は均質ではないようである。

次に地域的に東側を占める武庫川流域周辺を概観する。

神戸市北区の「二郎宮ノ前遺跡」は、12世紀末から継続する遺跡で、14世紀から15世紀前半には堀で囲まれた居館が営まれる。瀬戸・美濃系陶器には、卸皿2点、鉢2点、灰釉平椀4点、天目椀4点、小椀1点の計13点が出土している。また、輸入磁器には、青磁の碗7点、皿6点、白磁の碗4点、皿3点、水注1点の他に黄釉盤1点が出土している。但し、瀬戸・美濃系陶器は居館の外から主に出土している。

三田市の「中尾城跡」は16世紀前半の小規模な山城であるが、豊富な遺物が出土している。117点の土器が掲載されており、陶器110点、磁器3点（白磁皿2点、青花皿1点）、土師器4点が出土している。陶器では瀬戸・美濃系陶器が12点（10.3%）出土しており、内訳は皿6点、天目椀6点である。時期的には瀬戸・美濃大窯期となり、椀類は天目茶椀を主体とし、皿や卸皿などを導入する。

篠山市「旧多紀郡丹南町」の「初田館跡」は、鎌倉時代には井戸や墓などが存在し、武士階級が居住している。15世紀末から16世紀中頃までは、堀と土塁に囲まれた館が機能している。瀬戸・美濃系陶器は、皿6点、椀9点、水滴1点、卸皿2点が出土。椀には天目茶椀6点、丸椀1点、青磁写し蓮弁文椀2点がある。輸入磁器には青花の皿3点、碗7点、白磁の碗5点、皿1点、小壺2点、青磁の碗6点が出土している。やはり時期的には瀬戸・美濃大窯期が主体である。初田館跡では、供膳具は地元産が主体となり、用途に応じて遠隔地から運ばれた瀬戸・美濃焼と輸入中国産磁器が補完している。調理具・貯蔵具は丹波焼が主体となり備前焼が補完し、特殊な用途（卸皿等）は瀬戸・美濃焼を用いる。（岡崎1991）と分析されている。一部急流となる武庫川による河川交通は近世に至ってあまり発展せず、この地域の流通は、山陰道などの陸路によって京へ通じていた地域の一様相を示しているものと考えられる。

「兵庫津遺跡（神戸市兵庫区）」は、16世紀前半に堺にその座を奪われるまでは、古代から中世にかけての日本最大規模の流通の拠点である港湾都市である。ここを通じて大陸のものや備前焼をはじめとした西日本の物資が、都や畿内各都市、さらに東の地へと流通し、また東の物資が西へと流通した。長期にわたって継続し、播磨のみならず瀬戸内の物資流通の様相を知ることができる遺跡である。

ここで瀬戸・美濃系陶器の動静について藤澤編年に従って以下のようにまとめられている（岡田2003）。  
13世紀後半（兵庫津二期後半）前二期相当の灰釉入子

14世紀前半（同III期）中II期相当の天目茶椀・卸皿・花瓶

14世紀中頃～後半貿易陶磁の減少に符合するかたちで、椀類の比率が高くなる。

（同IV期）後I II期灰釉平椀、中III期の灰釉未広椀、後I期の天目茶椀、中IV期水滴

15世紀前半～中I（同V期）天目茶椀、卸皿、折縁皿、直縁大皿

15世紀後半～16世紀初頭（同VI期）後IV期古・新の天目茶椀、後IV期卸皿

16世紀前半～後半（同VII期）大窯III期天目茶椀、灰釉皿などが僅かに見られる。

16世紀末葉～17世紀初頭（同VIII期）大窯V期天目茶椀、灰釉皿、志野皿

17世紀前半～後半（同IX期）瀬戸・美濃系陶器は姿を消す。

兵庫津遺跡は港湾都市としてのみならず、東西の陸路である山陽道や有馬道などの南北の陸路を控えた交易中継都市であり、海上交通による流通のみならず、陸路を通じた流通にも大きな影響を与えていた。ここにおける瀬戸・美濃系陶器の流通の様相も、瀬戸内沿岸のみならず播磨内陸部まで影響を与えていたことが想像される。山陽道に沿う「小犬丸大谷遺跡（たつの市）」出土した灰釉小壺も、鎌倉武士の入部が想定される小規模な集落・屋敷に搬入され、地鎮具として用いられた初期の例のひとつであろう。

また、岩座神光寺遺跡例のように、多くの坊院をもつ寺院には古くから瀬戸窯の製品が持ち込まれていた。兵庫県内では他にも、「石峯寺経塚（神戸市 藤澤編年Ⅱ b期灰釉四耳壺）」「馬場寺庵寺（篠山市 同中Ⅱ期灰釉水注）」でもおそらく海上交通や陸路を通じて搬入されており、経塚や中世墓などで用いられている。

以上のように、兵庫県内における瀬戸・美濃系陶器の流通は、兵庫津遺跡で見られるような大きな流れの中で理解でき、その背景には東国勢力の入部や貿易陶磁の減少などの社会的動静が影響し、また初期の段階では、城館や寺院などの権力階層に採り入れられていたものである。北播磨東部の多可郡にある岩座神光寺遺跡や円満寺東の谷遺跡での状況も、大きくはこの様相に符合していることがわかる。

兵庫県内の中世の遺跡の発掘調査では、瀬戸・美濃系陶器はわずかであるが主として城跡や居館跡、寺院跡などから出土する。数点の出土がほとんどで、出土した土器全体からの比率では1割を下回る。また、出土した器種のほとんどが灰釉皿、鉢皿や天目茶碗である。これらの器種は生産期間も長く、また小型で流通しやすかったためであろう。

初期の段階で大型品が搬入され、他地域より灰釉平桙を好んだ多可郡域の状況がやや特殊であることは、郡内に存在する寺社・城館の勢力が直接、間接的に京の都に結びつきがあったこととともに、源義経や足利尊氏が都から陸路を通ってこの北播磨に進入したことからもわかるように、山陰道などの陸路を通じて都と地理的に結びついていたことが、大きく影響しているものと考えられる。その背景には和紙や鉄鍋といったブランド商品や、山で産出する物資を搬出して逆方向の流通も存在しており、銅鉱山の開発もこの時期には進められていたものと想定される。

茂利・宮の西遺跡では鉄鍋の鋳造が確認できたが、遺構埋土の成分分析や周辺の鋳物師の動向から銅鉄兼業の鋳物師が存在していた可能性が高い。大小の鍋の生産があこなわれていることから、単純な出吹きではなく、ここに鋳物師の拠点があったことも考え得る。しかしながら、瀬戸灰釉平桙を所持できる階層の存在から近辺の寺社・居館に包括された鋳造所であった可能性も否定できない。

#### [参考文献]

- 伊藤喜久男 1985「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 岡崎正雄 1991「室町時代の土器について」『初田館跡』兵庫県文化財調査報告書第116冊
- 岡田章一 2003「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告書第270冊
- 藤澤良祐 1995「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸前期様式の編年」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1995「古瀬戸」概説 中世の土器・陶磁器『中世土器研究会』
- 藤澤良祐 1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念
- シンポジウム資料集『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター』

- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 西山田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会 1998 「円満寺東の谷遺跡」中町文化財報告18-1
- 中町教育委員会 1994 「貝野前遺跡」中町文化財報告10
- 中町教育委員会 2002 「思い出遺跡V」中町文化財報告28
- 多可町教育委員会 2006 「田野口・館町遺跡II」多可町文化財報告4
- 多可町教育委員会 2008 「坂本・坂の下遺跡 稲屋・チガキ遺跡 稲屋・北焼手遺跡 稲屋・稻荷遺跡」  
多可町文化財報告9
- 加美町教育委員会 2004 「岩座神神光寺遺跡」加美町文化財報告9
- 兵庫県教育委員会 1990 「有馬遺跡・泉田遺跡」兵庫県文化財調査報告第101冊
- 兵庫県教育委員会 1991 「初田館跡」兵庫県文化財調査報告書第116冊
- 兵庫県教育委員会 2000 「二郎宮ノ前遺跡」兵庫県文化財調査報告第220冊
- 兵庫県教育委員会 2003 「小丸丸大谷遺跡」兵庫県文化財調査報告第265冊
- 兵庫県教育委員会 1991 「野村構層跡」兵庫県文化財調査報告第111冊
- 西脇市教育委員会 1996 「野村構層II」西脇市文化財調査報告書第6集
- 西脇市教育委員会 1999 「比延前田遺跡」西脇市文化財調査報告書第8集
- 岡田章一からは中世瀬戸灰釉陶器や中近世土器についての教示を受けた。

表2 遺物観察表

No	出土 地区	出土 通構	種別	器種	法量			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
1	A区	SK5	弥生土器	鉢	10.15	6.3	4.05	平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部。	ナデ調整	
2	A区	SK5	弥生土器	鉢	(12.65)	(3.10)		内湾気味の口縁部。	内面はハケ後ナデ。外表面はナデ。口縁部外面は横方向のナデ。	外面に黒斑。内外赤褐色顔料塗布か。
3	A区	SK5	弥生土器	鉢	(11.40)	(4.75)		内湾気味の体部から外反する口縁部。	内外面ナデ調整後、アラガキ状の三カナ。	
4	A区	SK5	弥生土器	壺		(2.90)		外反する口縁部。端部を上方につまみ上げ、外方に面をもつ。	外表面横方向のハケが残る。	
5	A区	SK5	弥生土器	底部		(3.00)	5.50	やや丸みをあびて突出する底部。	外表面にはハケが残る。	底面に葉脈痕。
6	A区	SK5	弥生土器	脚付鉢		(4.50)	4.00	短い脚台から内湾気味に立ち上がる体部をもつ。	脚台はユビおさえを残してナデ仕上げ。体部もナデ仕上げ。	製塙土器の可能性あり。
7	A区	SK6	土師器	焜培	(24.70)	(4.60)		体部は僅かに内湾気味にはほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面ヨコナメ調整。	焼成 良好。外面に保付着。色調 内面にぶい緑色。
8	A区	SK6	施釉陶器	壷	(23.10)	(3.60)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に強めの凹みをもち、若干内側に肥厚する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面に6条1位の櫛指きの縦目を施文。内面全体とも赤土部塗布。	焼成 良好。色調 黒褐色。丹波燒？。
9	A区	SK6	無釉陶器	壷	(37.60)	5.00		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部の形状の小さく1枚條で新面3角形状の小さな1枚條を作れる。口縁部上面に浅縫2條。口縁部内面 番線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面、外側に強めの凹みをもち、若干内側に肥厚する。新面の上面の縦目施文。内面、赤土部塗布。褐色に発色。	内面 灰黒色。外面にぶい褐色。丹波燒。17世紀代。
10	A区	SK6	無釉陶器	盤	(29.60)	(3.75)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁部は強めに弧面をつく。	内外面とも強い回転ナデ調整。内外面とも赤土部を塗布。	焼成 良好。黒褐色。丹波燒？。
11	A区	SK6	無釉陶器	壺	(24.00)	(12.70)		体部は内肩、口縁部は傾斜して、頸部は横方向に拡張する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面、回転ナデ調整。内面部分的に灰被り、環状の耳を貼り付けた破片があり。	焼成 良好。色調 ぶい緑色。丹波燒。
12	A区	SK6	無釉陶器	火入れ	(4.60)		(9.80)	平底。底部外周を低くケズリ残す。体部は直線的か少し上方に屈む。中位でくの字状に屈曲して、ほぼ直上に延びる。	体部内外面、回転ナデ調整。体部外表面、ヘラケズリ調整。底部内面に灰被り附着。	焼成 良好。ぶい緑色。丹波燒。
13	A区	SK6	施釉陶器	皿		(3.00)	(4.35)	高台は新面台形状で幅広く低い。体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内面内側にも灰被り施施。暗才リーピ色に発色。底部内面に自然施文。外側に白目施文。やや外側の体部下半以下、露胎。	肥前系 唐津。17世紀後半～18世紀前半。
14	A区	SK7	土師器	皿	(7.90)	1.80	5.70	口クロ成形。平底。底面の器壁は厚い。体部は直線的か少し上方に屈む。中位でくの字状に屈曲して、ほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面、回転ナデ調整。底部外表面、不調整。系切痕が残る。	底部外表面に黒斑あり。焼成ややあまい。色調 ぶい緑色。
15	A区	SK7	須恵器	鉢		(2.60)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上方につまみ上げる。	内外面とも強い回転ナデ調整。	口縁部外表面に重ね焼き痕。焼成 良好。色調 灰色。東漢系。
16	A区	SK7	施釉陶器	皿	(13.50)	2.80	(4.50)	高台は新面台形状で比較的小い。底部の器壁は厚い。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は強めにひらく。口縁部上面に強めの丸味をもつ。内側の底部と体部の界に浅い凹みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。内面内側にも灰被り施施。灰才リーピ色に発色。底部内面に自然施文。外側に白目施文。外側の高台脇以下、露胎。	肥前系 唐津。17世紀前半。
17	A区	SK7	無釉陶器	鉢	(20.95)	10.40	(12.70)	平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり。体部上方で内肩、ほぼ直上に延びる。口縁部は横方向に拡張して、口縁部上面に弧面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面、回転ナデ調整。内面、赤土部塗布。内面に自然施文。底部外表面、ヘラあごに痕が残る。	焼成 良好。暗赤褐色。備前焼。
18	A区	SK7-9	施釉陶器	甕	(38.90)	(6.00)		体部は内肩気味に外上方に延びる。口縁部上面に弧面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。外表面、灰被り施施。黒褐色に発色。内面、薄く古灰をもつ。	焼成 良好。色調 黒褐色。丹波燒。
19	A区	SK9	土師器	皿	(8.60)	1.65	(5.10)	口クロ成形。平底。底面は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底面内面、系切痕が残る。	ややあまい。ぶい緑色。色調。
20	A区	SK9	施釉陶器	椀	(7.60)	(3.30)		体部は内肩気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰被りを全面に施施した後、部分的に回転施施。	焼成 良好。暗褐色。丹波燒？。

No	出土 地区	出土 遺構	種別	器種	法 量			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
21	A区	SK9	染付磁器	碗		(2.65)	(4.70)	高台は断面台形状で比較的高い。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。	器面に虫食いが目立つ。尾前系 初期伊万里か? 17世紀前半。
22	A区	P 10	土師器	皿	(9.80)	(1.60)		口クロ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面、強い回転ナデ調整。体部外面、工具痕が見られる。	口縁部外面に煤附着。焼成 良好。色調 棕色。
23	A区	SD3	施釉陶器	皿		(1.35)	(7.40)	平底。底部の外周を浅くケズリ残して、低い高台を作る。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも長石粒を施釉。やや青味を帯びた灰白色に発色。	美濃焼。志野皿。17世紀前半。
24	A区	SD4	瓦	斐斗瓦	長 29.35	幅 13.0	厚 2.1			器面の摩滅が著しい
25	A区	包合層	無釉陶器	擂鉢		(3.70)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。内面、ヘラ記号あり。	片口が僅かに認められる。焼成 軽質。色調 にぶい橙色。
26	B区	SK14	施釉陶器	楕	(18.80)	8.20	(5.30)	平高台。底部外面の中央部を蛇の目状に強く削り出す。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面、強い回転ナデ調整。体部外面、回転ナデ調整。底部外面、糸切痕が残る。内外面とも灰釉施釉。オリーブ色に発色。体部外面下辺以下、露胎。	内面に茶筅の擦痕あり。瀬戸・美濃系灰釉陶器。平楕。15世纪代。
27	B区	SD5	土師器	皿?	(3.20)			器壁は比較的厚い。体部は僅かに内側気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。		器面の摩滅が著しい。内外面ともヨコナデ調整。
28	B区	SD5	土師器 (硬質)	鍋	(20.20)	(11.30)	(23.30)	器壁は全体に比較的薄い。体部内窓、頸部は僅かに外傾する。口縁端部は若干水平方向に引き出す。	口縁部内外面、強いヨコナデ調整。体部内面、同心円の当面痕が見られる。体部外面、平行叩き目が見られる。	外面に若干自然釉が掛かる。焼成 塗絵。色調 黄灰色。丹波焼。長谷川分類 摂丹型類。
29	B区	SD5	土師器 (硬質)	鍋		(6.20)		体部は内窓。頸部は直立。口縁端部は横方に若干抵張する。	口縁部内外面、強いヨコナデ調整。体部内面、ナデ調整。体部外面、平行叩き目が残る。	焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。
30	B区	SD5	施釉陶器	楕	(17.00)	6.10	4.90	平高台。底部外面の中央部を蛇の目状に強く削り出す。底部の器壁は比較的薄い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面、強い回転ナデ調整。体部内外面、回転ナデ調整。底部外面、糸切痕が残る。内外面とも灰釉施釉。オリーブ色に発色。体部外面下辺以下、露胎。	底部外面に目跡 5箇所。瀬戸・美濃系灰釉陶器。平楕。15世纪代。
31	B区	SD5	施釉陶器	楕		(1.50)	5.20	平高台。外面は中央部を蛇の目状に浅く削り出す。	内面、灰釉施釉。灰黄色に発色。外面、露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器板。
32	B区	SD5	施釉陶器	楕		(2.85)	(5.65)	平高台。体部は直線的に外上方に立ち上がる。		器面に貫入。瀬戸・美濃系。灰釉陶器板。
33	B区	SD5	施釉陶器	鉢皿		(1.95)	(8.90)	平底。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	体部外面、回転ナデ調整。底部内面、格子状にヘラ状工具で御目施文。内面部的に灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面、露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器鉢皿。15世纪代。
34	B区	SD5	無釉陶器	擂鉢		(2.75)	(14.00)	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面、回転ナデ調整。内面 8~9巻1单位の横目を施文。	焼成 良好。色調 棕灰色。備前焼。
35	B区	SD5	青磁	皿	(14.45)	(2.00)		体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に形成。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。16世纪代。
36	B区	SD5	青磁	皿	(12.00)	(1.90)		体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。16世纪代。
37	B区	SD6	須恵器	楕		(2.95)		体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	釉層は比較的厚い。龍泉窯系青磁。
38	B区	SD6	須恵器	楕		(2.00)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	口縁部外面に重ね焼き痕。焼成 良好。色調 灰色。
39	B区	包合層	土師器	擂鉢	(25.40)	(4.50)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面、ヨコナデ調整。体部内面ヨコナデ調整の後、横方向に細かいイケ目調整。横方向の横目調整。	外面に煤附着。焼成 良好。色調 灰黃褐色。

報告 No	出土 地区	出土 遺構	種別	器種	法 量			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
40	B 区	包含層	須恵器	椀	(12.80)	(3.45)		体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部・体部外面、回転ナデ調整。体部外面に凹線1条。	口縁部外面に重ね焼き痕。焼成 良好。色調 灰色。
41	B 区	包含層	土製品	面子	長 3.05	幅 2.9	厚 0.95	平面は円形、断面は台形状。	器面の摩減が著しく、非常に平滑。	良好。色調 にぶい赤褐色。
42	C 区	SE1	土師器	皿		(3.00)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。	不良。色調 にぶい黄褐色。
43	C 区	SE1の南 包含層	土師器	脚部		(3.00)		器台あるいは高杯の脚部か?	内外面ともヨコナデ調整。	焼成 色調 あまり。浅黄褐色。
44	C 区	SE1の南 包含層	土師器	皿	(5.85)	(1.50)		半口クロ成形。器壁は全体に直線的で、底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。	内外面ともヨコナデ調整。底部・底部内面、指あさえ。指頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 にぶい褐色。
45	C 区	SE1の南 包含層	土師器	皿	(5.60)	2.00		半口クロ成形、平底。体部と底面の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。	外面に一部剥附着。焼成 良好。色調 良好。色調 にぶい褐色。
46	C 区	SE1の南 包含層	土師器	皿	(8.70)	1.95		半口クロ成形。器壁は比較的直線的で、底部と底面の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。	口縁部内面、強いヨコナデ調整。底部内外面、指あさえ。指頭圧痕が残る。	底部外面に黒斑。焼成 良好。色調 棕色。
47	C 区	SE1の南 包含層	土師器 (硬質)	鍋	(19.60)	(4.75)		口縁部は僅かに内傾。口縁部外面に輪状の矧い凸帯貼り付け。	口縁部・体部外面、ヨコナデ調整。体部外面、平行叩き目が残る。	形的には土師器插磨型鍋に類似。焼成 良好。色調 にぶい褐色。
48	C 区	SE1	須恵器	皿	(15.80)	(2.50)		体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内面、強い回転ナデ調整。体部内面、回転ナデ調整。	口縁部外面に重ね焼き痕。焼成 良好。色調 灰色。
49	C 区	SE1の南 包含層	須恵器	椀		(2.10)	(5.20)	低い平高台。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面、不調整。糸切痕が残る。	焼成 良好。色調 灰白色。
50	C 区	SE1の南 包含層	須恵器	椀		(2.80)	(5.30)	平高台。高台側面はナデ調整。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面、不調整。糸切痕が残る。	焼成 良好。色調 灰白色。
51	C 区	SE1の南 包含層	須恵器	椀		(2.40)		平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面、不調整。糸切痕が残る。	焼成 不良。色調 灰黄色。
52	A 区	SK6	施釉陶器	皿				高台は比較的の低く、粗く削り出す。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。内面、灰釉局部。蛇の目状に釉ガハギがある。外面、露胎。	肥前系 唐津。17世紀後半~18世紀前半。写真のみ。
53	A 区	SK6	染付磁器	壺				高台は断面台形状で比較的高い。体部は内側刻意味に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。波佐見系の粗製の壺は生掛けでノリが悪い。内面、露胎。	肥前系。波佐見度の粗製の壺は生掛けでノリが悪い。内面、露胎。
54	A 区	SK6	瓦	丸瓦				須恵器瓦広端模片。	凹面布目。底面面取り。	焼成 良好。色調 暗灰色。写真のみ。
55	A 区	SK7	須恵器	鉢				須恵器鉢の口縁部片。口縁部は上下に拡張して小さい輪帶を形成する。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成 良好。口縁部外面に重ね焼き痕、色調 灰色。東播磨。13世紀後半代。写真のみ。
56	A 区	SK7	施釉陶器	椀?				平底。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内面、铁釉施釉。外面、露胎。底部外面に糸切痕が残る。	焼成 良好。色調 内面 铁釉色。外面、露胎。にぶい黄褐色。丹波焼。16世纪後半~17世纪前半。写真のみ。
57	B 区	包含層	無釉陶器	壺鉢				壺鉢の体部片。体部は直線的に外上方に延びる。	粘土紐巻上げ成形。内面 ヘラ括きの儘目施文。外面回転ナデ調整。	焼成 やや乾燥。色調 淡赤褐色。丹波焼。16世纪後半~17世纪前半。写真のみ。

No	出土 地区	出土 遺構	種別	法量				形態の特徴	細部の特徴	色調・備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g			
M 1	A 区	SK2	鋳型	11.15	20.15	7.00	973.60	焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。内径6.0cmを復原し、粗型上方に外反、口縁部に近か。	粗型表面に横方向の条痕。ユビナデ。真土厚さ1cm。横方向のスザ。0.8cmまでの砂粒含む粗型厚さ6.8cm。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/4(浅黄)~2.5Y6/2(灰黄)
M 2	A 区	SK2	鋳型	13.00	20.90	4.55	898.20	内訶した焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。横方向の内径6.0cmを復原し、粗型上方に外反、口縁部に近か。	真土は3cm以上に分かれ。厚さ2~2.2cm。粗型厚さ3.6cm~。粗型には横方向のスサが入る。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/4(浅黄)~10Y8/2(灰黄)
M 3	A 区	SK2	鋳型	9.60	6.10	4.90	197.50	焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。横方向の内径6.0cmを復原し、粗型上方に外反、口縁部に近か。	真土厚さ1.2cm。スサの多い粗型厚さ4cm~。	真土2.5Y7/2(灰黄)粗型10Y8/4(浅黄)~10Y8/2(灰黄)
M 4	A 区	SK2	鋳型	7.80	7.35	4.46	187.40	焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。	真土厚さ0.9~1.3cm。スサの多い粗型厚さ3.2cm~。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/4(浅黄)~10Y8/2(灰黄)
M 5	A 区	SK2	鋳型	5.65	6.70	4.40	123.50	腹方向に内済した焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。	真土厚さ1.8~2.8cm。スサの多い粗型厚さ2.1cm~。	真土2.5Y7/2(灰白)粗型10Y8/3(浅黄)~10Y8/2(灰黄)
M 6	A 区	SK2	鋳型	4.65	4.00	2.40	31.00	焼ブロック(粗型)上に真土を塗り、表面にクロミ塗布。	粗型表面に条痕。真土厚さ1.2cm。	真土2.5Y7/2(灰白)粗型10Y8/4(浅黄)~10Y8/2(灰黄)
M 7	A 区	SK2	鋳型	4.60	3.00	1.65	21.80	真土の一表面にクロミ塗布。粗型残存せず。	真土に1mmまでの砂粒含む。厚さ1.65cm。	2.5Y7/2(灰黄)
M 8	A 区	SK2	鋳型	4.80	4.00	2.60	34.90	真土の一表面にクロミ塗布。粗型残存せず。	真土に1mmまでの砂粒多く含む。	7.5Y7/4(4にぶい黄)
M 9	A 区	SK2	鋳型	2.85	4.35	1.3	14.2	真土の一表面にクロミ塗布。粗型残存せず。	真土に1mmまでの砂粒含む。裏面には横方向の条痕記。厚さ1.3cm。	2.5Y8/2(灰白)
M10	A 区	SK2	鋳型	2.95	3.65	4.60	34.60	真土の内面、天面に鉢分付軸。	0.3cmまでの砂粒含む。	5Y6/1(灰)~10Y8/2(3浅黄)
M11	A 区	SK2	鋳型	3.35	5.60	3.60	51.80	やや外反した真土の天面に鉢分付軸。	0.5cmまでの砂粒含む。	10Y6/2(2にぶい黄)~7.5Y6/7(4)
M12	A 区	SK2	鋳型	3.25	4.30	2.80	29.90	天がやや渦曲した真土の表面に赤褐色の細かい砂粒薄く付軸。	0.15cmまでの砂粒含む。	10Y8/3(3にぶい黄)~7.5Y8/4(4)
M13	A 区	SK2	鋳型	4.85	8.25	5.00	131.90	内訶した真土の天面に鉢分付軸。	内面天面が火化。口縁部附近か?	2.5Y8/1(灰黄)~7.5Y8/4(4にぶい黄)
M14	A 区	SK2	鋳型	5.10	3.90	2.00	31.80	焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。	真土は薄く残存。粗型厚さ2cm~。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/3(3にぶい黄)
M15	A 区	SK2	鋳型	6.60	6.60	2.05	74.50	焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。	真土は薄く残存。粗型厚さ2cm~。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/3(3にぶい黄)~10Y8/2(灰黄)
M16	A 区	SK2	鋳型	6.80	5.50	2.20	44.10	内訶した焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。	真土は薄く残存。粗型厚さ2.2cm~。	真土2.5Y7/2(灰)粗型10Y8/3(3にぶい黄)
M17	A 区	SK2	鋳型	5.35	7.15	3.00	90.60	焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。	真土は薄く残存。粗型厚さ2.7cm~。横方向のスサ細胞膜。	真土2.5Y7/3(浅黄)粗型10Y8/3(3にぶい黄)~10Y8/2(灰黄)
M18	A 区	SK2	鋳型	3.40	6.10	2.30	38.20	外反した焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。	真土は薄く残存。	真土2.5Y7/2(灰)粗型2.5Y5/2(暗黄)
M19	A 区	SK2	鋳型	8.25	8.95	4.65	276.20	焼ブロック(粗型)の表裏天面に鉢分軸。裏面に真土一部付軸。右方にやや渦曲。	粗型厚さ4.6cm。胎土にモミ痕。表面には次線跡、横方向のユビナデ。	7.5Y8/2(4浅黄)~2.5Y5/1(黄)~7.5Y8/4(4にぶい黄)
M20	A 区	SK2	鋳型	5.25	5.90	5.80	113.80	内訶した焼ブロック(粗型)上に真土を塗る。天面地顔が残存。内面、天面に真土一部付軸。	粗型厚さ5.8cm~。胎5cm。胎土にモミ痕。	5Y6/1(灰)~7.5Y8/6(浅黄)
M21	A 区	SK2	鋳型	5.05	6.15	3.80	94.60	粗型。表面、天面残存。	0.6cmまでの砂粒含む。表面はナデ調整。	7.5Y8/0/6(4)~7.5Y8/3(4にぶい黄)
M22	A 区	SK2	鋳型?	4.00	4.70	3.95	42.20	輪郭形の土製品。上部が突出する。最大径10cm程か。	表面に薄く真土付着。スサ・モミ含む。	7.5Y8/2(4)内型か?
M23	A 区	SK2	土製品	5.30	5.35	3.30	5.95	切妻円錐状だが、歪んでいる。側面のみ灰色に少しひび。鋳型焼成用支柱。	ナデ調整の後、指さえ。指圧痕が残る。スサ・モミ含む。	7.5Y8/6(4)鋳型焼成用支柱か。
M24	A 区	SK6	鋳型	6.50	8.25	5.30	223.90	焼ブロック(粗型)表裏天面鉢付。天面内側に隙ぐ。	0.5cmの砂粒含む。	7.5Y8/2(4)~2.5Y5/1(黄灰)
M25	A 区	SK6	鋳型	5.20	6.70	4.40	114.30	焼ブロック(粗型)表裏天面鉢付。	表面ナデ調整。モミ痕。0.25cmの砂粒含む。	7.5Y8/2/4(3にぶい黄)~10Y8/4(浅黄)~9Y3/1(オリーブ)
M26	A 区	SK10	鋳型	3.00	4.40	1.20	15.40	第1粘土板上に薄井みの握り込み。裏面に赤褐色の細かい砂粒付軸。	表面は高温で焼けているが、真土は見られない。	NB(灰白)~7.5Y8/4(4にぶい黄)~9Y3/1(黄)
M27	A 区	SK10	鋳型	2.85	4.30	4.50	43.40	真土の表裏面、天面鉢付。鉢付軸。左右にやや渦曲。	表面が火化。0.4cmまでの砂粒含む。	5Y7/1(4灰白)~10Y8/7/3(4にぶい黄)
M28	A 区	SK10	鋳型	5.15	4.00	2.50	22.80	焼ブロック(粗型)に真土一部付軸。左右にやや渦曲。	粗型表面には横方向のユビナデ。真土薄く残存。	10Y8/4(4黄)~10Y8/6/3(4にぶい黄)

No	出土 地区	出土 遺構	種別	法量				形態の特徴	縁部の特徴	色調・備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g			
M29	B区	SK03	焼型	4.00	5.15	3.40	47.80	厚さ3.4cm~の焼ブロック。外側が円弧を描く。上面残存。下内側欠損。	上面に薄く真土付着。外面に一部かかる。スサ・モミ含む。	10YR7/3(にぶい黄褐)
M30	B区	SK04 検出	焼型	4.45	5.05	5.10	90.00	厚さ3.0cmの焼ブロック。外側が円弧を描く。上面残存。下内側欠損。	スサ・モミ含む。	7.5YR7/6(褐)
M31	B区	SK04 検出	焼型	5.15	6.90	4.70	128.50	厚さ3.0cmの焼ブロック。外側が円弧を描く。上面残存。下内側欠損。	胎土中にスサ・モミ含む。上面・外面に細砂粒付着。	5YR6/4(褐)
M32	B区	SK06	土製品	8.20	3.55	3.50	8.17	形状は切削円錐状。一側面のみ灰白灰に火化。	外面・指あさえの後、ナデ調整。スサ・モミ含む。	7.5YR6/4(にぶい黄褐) 焼型焼成用支脚か。
M33	B区	SK06	焼型	6.05	6.40	4.35	120.50	厚さ4.5cm~の焼ブロック。上面外側一部残存。下内側欠損。	スサ・モミ含む。	10YR7/3(にぶい黄褐)
M34	B区	SK06	焼型	14.20	15.45	7.35	982.50	石臼状に上面の外周が一段高くなる円錐状焼成ブロック。直径30cmを復原。	上面に縮れやねじれ付着。真土か砂粒から上面にかけて強く二次窓が開け、スサ・モミ含む。	2.5YR7/6(褐)~2.5Y8/1(灰白)~2.5Y5/6(明赤褐色)
M35	B区	SK07	焼型	14.40	13.10	5.30	663.20	厚さ5.3cm~の焼ブロック。内側が円弧を描く。円弧の直角。上面下内側残存。外側欠損。	胎土中に-0.5cmの砂粒。円弧に一部かかる。下面不正方に窓現。スサ・モミ含む。	真土の一部灰白に火化。 5YR6/4(褐)
M36	B区	SK07	焼型	8.30	10.65	4.90	399.40	厚さ3.3cmの焼ブロック。内側が円弧を描く。円弧の直角。上面下内側残存。外側欠損。	胎土中に-0.5cmの砂粒。ガラス質。スサ・モミ含む。	7.5YR6/4(褐)
M37	B区	SK07	焼型	4.80	6.55	4.55	99.50	厚さ2.5cmの焼ブロック。外側が円弧を描く。上面下内側残存。外側欠損。	下面に薄く真土付着。スサ・モミ含む。	真土は接合剤か。 10YR7/3(にぶい黄褐)
M38	B区	重機・ 橋脚	焼型	6.50	7.00	5.30	169.00	厚さ3.0cmの焼ブロック。外側が円弧を描く。上面下内側残存。外側欠損。	上面に薄く真土付着。外面に円弧を描く。上面残存。下内側欠損。一部かかる。スサ・モミ含む。	真土は接合剤か。 7.5YR7/6(褐)
M39	A区	SK2	焼型	2.00	1.60	0.85	2.90	真土の一面面上にクロミ塗布。粗型残存せず。	厚さ0.85cm。	写真のみ
M40	A区	SK2	焼型	1.80	2.00	1.45	3.80	真土の一面面上にクロミ塗布。粗型残存せず。	真土に1mmまでの砂粒含む。厚さに45cm。	写真のみ
M41	A区	SK0	焼型	2.60	2.00	1.35	5.40	真土の一面面上にクロミ塗布。粗型残存せず。	120°の角度の2面にクロミ付着。	写真のみ
M42	A区	SK2	焼型	3.00	1.90	2.05	8.60	円柱状の土製品か。	スサ含む。	写真のみ
M43	A区	SK2	焼型	2.70	2.40	1.90	11.40	直径3cmほどの円柱状の土製品か。	真土状胎土。	写真のみ
M44	A区	SK00	焼型	3.30	2.80	1.90	15.40	直径2.5cmほどの円柱状の土製品か。	表面に真土付着。スサ含む。	写真のみ
M45	A区	SD3	焼型	4.30	2.90	1.90	17.40	焼ブロック。円柱状の土製品か。	スサ含む。	写真のみ
M46	A区		焼型	6.00	7.60	4.30	198.00	直径8cm程度の円錐台状土製品。表面に真土付着。	真土は表面全体に薄く付着。胎土は砂粒含むが、真土に近し。範囲は平面ではない。	写真のみ 内型か?
M47	A区	SK00	焼型	5.70	4.70	2.85	48.70	円柱状土製品。表面火化。	真土状前だだが、スサ0.2cmまでの砂粒。ガラス浮遊含む。表面に平滑ではない。	写真のみ 内型か?
M48	A区	SK00	焼型	6.80	7.50	2.70	130.00	厚さ6.8cm~の焼ブロック。上面・外側一部残存。下内側欠損。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M49	B区	SK05	焼型	4.10	5.00	2.30	55.60	焼ブロック。一面のみ残存。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M50	B区	SK02	焼型	3.40	4.40	2.75	40.00	焼ブロック。上面のみ残存。	上面に薄く真土付着。スサ・モミ含む。	写真のみ
M51	B区	SD8	焼型	4.30	3.40	4.00	53.40	焼ブロック。上面・側面一部残存。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M52	B区	SD8	焼型	3.60	3.10	2.65	25.10	焼ブロック。上面残存。	上面に真土薄く付着。スサ・モミ含む。	写真のみ
M53	B区	SD8	焼型	4.80	2.80	2.55	36.30	焼ブロック。上面残存。	上面に真土薄く付着。スサ・モミ含む。	写真のみ
M54	B区	SD8	焼型	4.30	2.40	2.60	24.70	焼ブロック。上面残存。	上面に真土薄く付着。スサ・モミ含む。	写真のみ
M55	B区	SD5	焼型	7.00	6.00	3.50	110.50	焼ブロック。上面・側面一部残存。側面や内側。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M56	B区	SD5	焼型	5.10	6.00	2.15	58.70	焼ブロック。上面・側面一部残存。側面や外側。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M57	B区	SD5	焼型	5.70	5.00	1.00	31.90	焼ブロック。上面残存。	スサ・モミ含む。	写真のみ
M58	B区	SD5	焼型	4.70	5.60	3.40	71.50	焼ブロック。一面のみ残存。	表面に条痕。スサ・モミ含む。	写真のみ
M59	B区	SD5	土製品	6.20	3.40	2.85	46.50	円柱状土製品。	スサ・モミ含む。	写真のみ。焼型焼成用支脚か。
M60	B区	SD5	土製品	4.10	5.50	2.70	46.50	円柱状土製品。	表面に真土一部付着。スサ・モミ・ラック含む。	写真のみ。焼型焼成用支脚か。
M61	B区	SD8	土製品	5.80	3.70	1.75	23.20	円柱状土製品。	灰色に焼成。砂粒多いが、スサ・モミ少しあむ。	写真のみ。焼型焼成用支脚か。

No	出土地区	出土遺構	種別	法量				形態の特徴	細部の特徴	色調・備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g			
F 1	A区	SK10	羽口	3.65	8.85	4.05	100.20	円筒状の内面をもつ。外面に津付着。羽口端部か?	粘土状の胎土上に真土状胎土。内径8.6cmを復原。	7.SYR8(浅黄橙)-SYR5/3(にふり赤褐)羽口口縁と接合する粘土。
F 2	A区	SK10	羽口部	2.05	3.70	3.05	19.60	円筒状の内面をもつ。外面に津付着。	きめ細かい砂粒の多い胎土(真土状)。直径12cmを復原。	7.SYR8(1褐色)-7.SYR7(2橙)羽口を接合する粘土。
F 3	A区	SK10	羽口部	2.05	4.55	2.70	18.60	円筒状の内面をもつ。外面に津付着。	きめ細かい砂粒の多い胎土(真土状)。直径12cmを復原。	7.SYR7(6橙)羽口を接合する粘土。
F 4	A区	SK10	羽口部	5.25	7.10	4.80	122.10	円筒状の内面をもつ。外面にガラス質津付着。端部か?	きめ細かい砂粒の多い胎土(真土状)。直径14cmを復原。	7.SYR8(1褐色)-7.SYR7(2橙)羽口を接合する粘土。
F 5	A区	SK1	炉材	9.80	15.50	7.00	532.50	ブロック状と鉢状が付着。	直方体ブロック、鉢状、薄片状ブロックが重なる。炉材の積み上げか、補修。	SYR6(1褐色), SYR6/4(にふり1橙), 7.SYR7/4(にふり1橙)
F 6	A区	SK1	炉材	6.1	7.6	4.65	136.5	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ2cm、砂粒の多い胎土。一面を平らに仕上げる。	NS/0(灰) - NV/1(灰白)
F 7	A区	SK1	炉材	5.05	7.35	4.05	90.40	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.5cm、砂粒の多い胎土。一面を平らに仕上げる。	NS/0(灰) - NV/0(灰白)
F 8	A区	SK1	炉材	5.7	9.6	4.5	113.4	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.5cm。 一面を平らに仕上げる。	SY7/1(灰白)
F 9	A区	SK2	炉壁	5.50	6.10	5.25	147.50	ブロック状。外面残存。 内面に2層の津付着。	ブロック厚さ3.5cm。	SYR3(にふり1橙)-2.SYR2(2灰日)
F 10	A区	SK2	炉壁	10.65	11.10	4.60	309.20	ブロック状。外面残存。 内面に白色色で気泡の多い津付着。	ブロック厚さ3cm。	7.SYR6/4(にふり1橙)
F 11	A区	SK6	炉床?	7.85	9.80	4.10	209.60	一面に津付着。	細かい砂粒を含む胎土。	2.SYR5/6(明赤褐) 7.SYR7(6橙)
F 12	A区	SK6	炉壁	5.45	7.45	4.75	135.10	ブロック状。外面残存。 内面に津付着。	ブロック厚さ4cm。 砂粒が入るが無理。	10YR8/3(浅黄橙)- 2.5YR2(灰白)-7.SYR7(2橙)
F 13	A区	SK6	炉材	4.45	6.20	2.30	58.20	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.8cm。 砂粒の多い胎土。	NV/0(灰白)
F 14	A区	SK6	炉材	6.40	8.35	6.25	197.60	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.8cm。 砂粒の多い胎土。	NV/0(灰) - 10YR7/3(にふり1黄橙)
F 15	A区	SK7	炉材	6.30	11.40	5.70	404.10	ブロック状。 一面に2層の津付着。	ブロック厚さ4cm。 ブロックは砂粒の多い胎土。 10YR8/2(灰黃褐)	NV/0(灰白)- 10YR8/2(灰黃褐)
F 16	A区	SK7	炉材	4.20	8.50	4.60	101.50	鉢状の材が鋭角に接合。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さともに1.6cm。 砂粒の多い胎土。	NV/0(灰) - NV/0(灰白), NV/0(灰) - NV/0(灰白)
F 17	A区	SK7	炉材	3.35	7.75	2.70	59.90	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.3cm。 砂粒の多い胎土。	NV/0(灰) - 7.5Y7/1(灰白)
F 18	A区	SK7	炉材	3.45	5.75	2.65	43.20	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.7cm、砂粒の多い胎土。 胎土一面を平らに仕上げる。	NV/0(灰白) - NV/0(灰白)
F 19	A区	SK10	炉壁	6.55	8.30	5.75	215.90	ブロック状。外面残存。 内面に津付着。	ブロック厚さ2.2cm。 砂粒が入るが無理。	2.SYR8/1(灰白) - 7.SYR7/4(にふり1橙)
F 20	A区	SK10	炉壁	5.80	6.20	4.90	145.50	ブロック状。外面残存。 内面に津付着。	ブロック厚さ3cm。	7.SYR8/6(浅黄橙)- 7.SYR7/4(6橙)
F 21	A区	SK10	炉壁	5.60	7.60	3.95	111.00	ブロック状。上面残存。 一面に津付着。	ブロック厚さ3cm。 上面に砂粒の多い胎土付着。 底付近のブロック胚目	10YR8/2(灰白) - 10YR8/3(にふり1黄橙) 底付近のブロック胚目
F 22	A区	SK10	炉壁	7.85	6.95	3.70	184.20	ブロック状。上面残存。 内面に津付着。	ブロック厚さ2.2cm。 上面に砂粒の多い胎土付着。 底付近のブロック胚目	2.SYR8/2(黄黒) - 7.SYR7/4(にふり1橙) 底付近のブロック胚目
F 23	A区	SK10	炉壁	6.50	8.50	5.15	209.10	ブロック状。 一面に2層の津付着。	ブロックは砂粒の多い胎土。	10YR8/3(灰赤)-10YR8/3(浅黄橙) 補修部か?
F 24	A区	SK10	炉材	3.60	9.55	2.40	64.10	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.6cm。 砂粒の多い胎土。	NV/0(灰白) - NV/0(灰白)
F 25	A区	SK10	炉材	3.80	7.80	3.40	72.50	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ1.6cm、砂粒の多い胎土。 一面を平らに仕上げる。	7.SY7/1(灰白)
F 26	A区	SK10	炉材	5.70	6.15	2.45	74.60	鉢状。 一長辺にガラス質津付着。	鉢の厚さ2.1cm、砂粒の多い胎土。 一面を平らに仕上げる。	NV/0(灰白) - 7.SYR7/4(にふり1橙)鉢端赤化、付着部。
F 27	A区	SK10	炉材	4.00	6.05	3.00	55.50	鉢状。 一長辺に津付着。	鉢の厚さ2.1cm、砂粒の多い胎土。 一面を平らに仕上げる。	2.5Y8/2(灰白) - 2.5Y8/1(黄灰)鉢端火化。
F 28	B区	SK12	羽口部	8.80	7.35	5.30	187.40	円筒状の内面をもつ。外面に津付着。羽口端部か?	砂粒の少ない胎土状の胎土。 内径13cmを復原。	7.SYR7/6(6橙) - 7.5RS/3(にふり赤褐)

No	出土地区	出土遺構	種別	法量			形態の特徴	細部の特徴	色調・備考	
				長さcm	幅cm	厚みcm				
F29	B区	SK4軸出	羽口部	3.35	6.20	6.00	73.00	円筒状の内面をもつ。外 面に浮付着。藻部か?	きめ細かい砂粒の多い胎 土(真土状) 内面に粘土付着。 羽口の剥がれた痕跡。 直径12cmを復原。	SYR5/灰明赤褐)- 7.SYR7/灰(羽口を接合す る粘土。
F30	B区	SD5	羽口	6.55	4.30	2.85	50.10	円筒状の内面をもつ。 外面に浮付着。羽口端部。	スサの少ない粘土状の胎土。 厚さ1~2.5cm。	7.SYR2//灰(程)
F31	B区	西側溝 ち込み	羽口部	5.40	5.65	3.90	62.30	内汚する真土状粘土の外 面に浮付着。	きめ細かい砂粒の多い胎 土(真土状)。	7.SYR8/灰(浅黄程) 羽口を接合する粘土。
F32	B区	SK13	炉材	5.25	6.15	2.30	71.10	鉛灰。 —長辺にガラス質浮付着。	鉛の厚さ2.1cm。 砂粒の多い胎土。 一面を平らに仕上げる。	SY7//灰(白)
F33	B区	SK13	炉材	4.80	7.85	2.50	75.90	鉛灰。 —長辺にガラス質浮付着。	鉛の厚さ1.8cm。砂粒の多 い胎土。	Ns/O(灰)
F34	B区	SK13	炉壁	10.20	11.75	6.40	487.90	ブロック状。外面残存。 内面にガラス質付着。	ブロック厚さ3.2cm。モミ・ スサ入り粘土。	2.SY6/灰(程)- 7.SYR6/4(にじい程)
F35	B区	SK15	炉材	3.45	7.65	3.25	65.10	鉛灰。 —長辺にガラス質浮付着。	鉛の厚さ1.6cm。砂粒の多 い胎土。一面を平らに仕 上げる。	Ns/O(灰)-N7//灰(白)
F36	B区	SK16	炉材	8.45	10.70	4.90	230.20	厚い津や鉄分に粘土が付着。	粘土はスサ・モミを含む。 スサを含む胎土。	SY6/灰(程) 10YR8/4(浅黄程) 羽口近くか?
F37	B区	SK16	炉材	7.00	13.40	4.55	316.90	外汚する形状。厚い津や 鉄分に粘土が付着。外面 残存。	厚さ2.5cm。 鉄分に粘土が付着。	Ns/O(暗灰)- 10YR8/4(浅黄 程 羽口か? 直径6cm。
F38	B区	SK16	炉材	8.50	5.55	4.70	141.80	外汚する形状。厚い津や 鉄分に粘土が付着。		7.SYR2//4(にじい程) 羽口近くか?
F39	B区	SK16	炉材	4.70	11.65	3.50	120.30	鉛灰。 —長辺にガラス質浮付着。	鉛の厚さ1.2cmと薄い。一 面を平らに仕上げる。	Ns/O(灰)-N7//灰(白)
F40	B区	SD5	炉床	6.60	6.00	2.10	65.10	細かい砂粒の胎土。 内面に浮付着。	津表面は気泡状の多孔質。 胎土部厚さ1.5cm。	SY5//灰(白)
F41	B区	SD5	炉壁	8.45	9.30	3.80	220.20	ブロック状。上面残存か。 内面に浮付着。	スサを含む胎土のブロック 厚さ1.6cm-。上面に細 かい砂粒の多い胎土付着。	10YR7/4(にじい黄程) 道元部なし。
F42	B区	SD6	炉材	7.55	10.35	4.40	177.70	舌状。ガラス質浮付着。	砂粒の多い胎土。	Ns/O(灰)
F43	B区	SD8	炉材	8.35	10.70	5.05	252.10	舌状。ガラス・津・炭・ 鉄分付着。	きめ細かい砂粒の多い胎土。 表面に浮付着。	2.SY6/1(黄灰)- 2.SY6/1(白)
F44	B区	SD8東の 落ち込み	炉床	7.85	8.45	2.20	84.60	細かい砂粒の胎土。 内面に浮付着。	津表面は気泡状の多孔質。 胎土部厚さ1.5cm。	SY5//灰(白)
F45	B区	西側溝 ち込み	炉壁	6.20	5.50	2.50	63.00	モミ・スサ入り胎土上に白 鉄分・多孔質浮付着。外 反している。	胎土にはスサ・モミ含む。	7.SYR8/4(浅黄程)
F46	B区	西側溝 ち込み	炉壁	6.10	10.10	4.60	163.20	モミ・スサ入り胎土上に、 きめ細かな砂粒含む真土 の胎土ブロックを重ね。 表面にガラス質浮付着。	真土状胎土の厚さは1.5- 2.0cmで二重に重なる。	SYR7/6(程)補修部或いはブ ロック崩ぎ目か。
F47	B区	西側溝 ち込み	炉壁	5.40	5.55	5.10	96.90	ブロック状。外面残存。 内面に白褐色多孔質浮付着。	ブロック厚さ4cm。スサ入 り粘土。	外面7.SYR6/4(にじい程) 炉底に近い?
F48	A区	SK6	炉材	5.00	10.80	3.95	200.80	鉛状のや材に鉄分や黒鉛 化した木材。ガラス質の スラッギング付着。	スラッギング部が大きい。	写真のみ
F49	A区	SK6	羽口?	4.50	6.10	3.40	59.70	内汚する土製品の外面に 浮付着。	きめ細かい砂粒の多い胎土。	写真のみ
F50	A区	SK2	羽口	6.00	4.00	2.20	35.00	厚さ1.5cmほど円筒状。 土製品外面に浮付着。	胎部。	写真のみ
F51	B区	SK16	羽口	4.40	3.30	2.15	22.80	内外の一部残存。外面は 強く火化し、先端の形状 濃縮か。		写真のみ
F52	B区	SK16	鉛型?	6.90	5.50	2.35	94.50	内汚する焼ブロック。	スサ・モミ含む。	写真のみ
F53	B区	SK4軸出	羽口?	4.00	6.00	2.25	33.50	厚さ1cm以下の円筒状土 製品外面に浮付着。	スサ・モミ含む。	写真のみ
F54	B区	SD5北隣 落ち	羽口?	3.40	5.30	4.80	71.20	内汚する真土状粘土の外 面に浮付着。	きめ細かい砂粒の多い胎 土(真土状)。	写真のみ

№	出土 地区	出土 遺構	種別	法量				形態の特徴	特 徴	色調・備考
				長さcm	幅cm	厚みcm	重量g			
SL1	A区	SK10	スラッグ	5.4	5.60	2.45	32.7	鉄錆質。炭化木材含む。		
SL2	A区	SK10	スラッグ	6.3	5.00	2.45	46.6	ガラス質。		
SL3	A区	SK7	スラッグ	5.00	7.50	3.80	84.30	一部焼土。ガラス質。	僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL4	A区	SD3	スラッグ	6.50	7.50	3.30	93.00	鉄錆質。炭化木材含む。		
SL5	A区	SK10	スラッグ	8.70	10.40	3.05	135.20		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL6	A区	P10	ガラス質 塊	5.00	8.30	2.35	90.30	盤状に固まつたガラス質の塊。		10Y3/2(オリーブ黒)
SL7	A区	SK1	ガラス質 塊	左端 5.5				船状に流れたガラス質の 破片多数。		10Y3/2(オリーブ黒)
SL8	B区	SK15	スラッグ	5.00	7.80	3.85	84.50	湾曲部ガラス質。		
SL9	B区	SDB	スラッグ	4.00	7.00	2.50	45.20		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL10	B区	SDB	スラッグ	4.40	3.90	1.70	26.40		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL11	B区	SDB	スラッグ	2.00	3.00	1.45	6.20	一部焼土。	僅かに磁性あり。	
SL12	B区	SDB 直束	スラッグ	4.40	6.20	2.40	42.60	鉄錆質。炭化木材含む。		
SL13	B区	SDB	スラッグ	3.70	4.30	1.00	13.70			10R3/2(暗赤褐色)
SL14	B区	SDB	スラッグ	3.20	2.80	1.85	13.70		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL15	B区	SDS 3区	スラッグ	4.00	6.10	2.80	61.10	鉄錆質。炭化木材含む。		
SL16	B区	SDS 3区	スラッグ	3.00	4.90	1.85	17.30		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL17	B区	SDS 3区	スラッグ	2.90	3.60	1.60	16.80	鉄錆質。	僅かに磁性あり。	
SL18	B区	SDS 3区	スラッグ	7.00	6.50	2.20	76.50		僅かに磁性あり。	10R3/2(暗赤褐色)
SL19	B区	SK12	スラッグ	10.10	14.00	5.10	408.90	ガラス質。舌状炉材含む。		

# 図 版

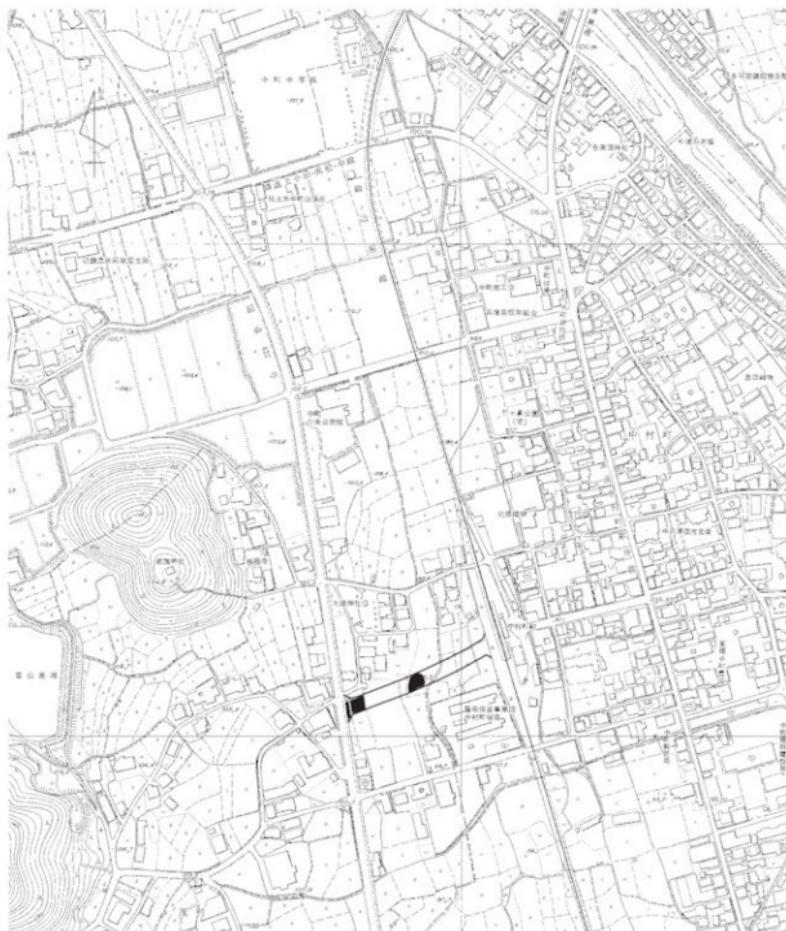
表3 周辺の遺跡

- ① 茂利・宮の西遺跡
- ② 富山地池遺跡
- ③ 思い出遺跡
- ④ 安坂・城の堀遺跡
- ⑤ 岡山1・2号墳
- ⑥ 茂利古墳群
- ⑦ 安坂古墳群
- ⑧ 東山古墳群
- ⑨ 多哥寺
- ⑩ 鍛冶屋遺跡
- ⑪ 円満寺東の谷遺跡
- ⑫ 西安田遺跡
- ⑬ 牧野・町西遺跡
- ⑭ 石垣山遺跡
- ⑮ 茂利・大將軍遺跡
- ⑯ 森本城(霞ヶ城)
- ⑰ 西安田城
- ⑱ 貝野城
- ⑲ 丸山遺跡
- ⑳ 茂利・畠の堂遺跡
- ㉑ 粢屋・稻荷遺跡



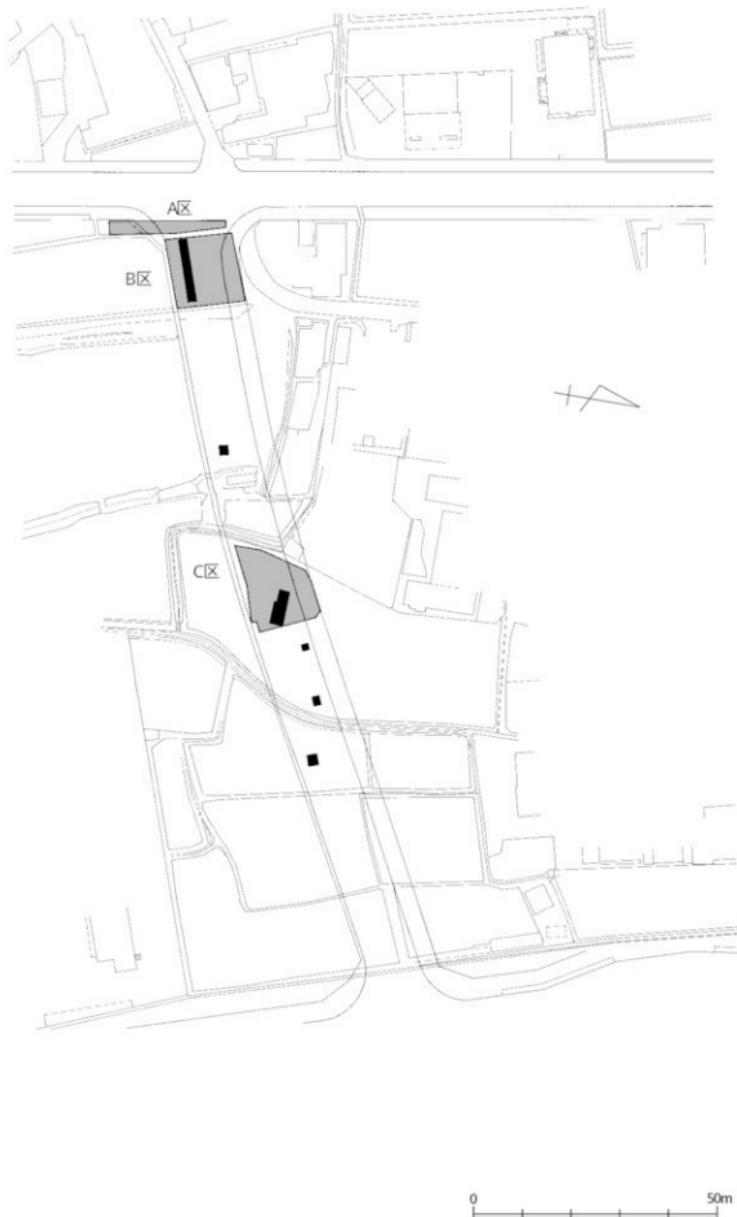
周辺の遺跡

図版 2



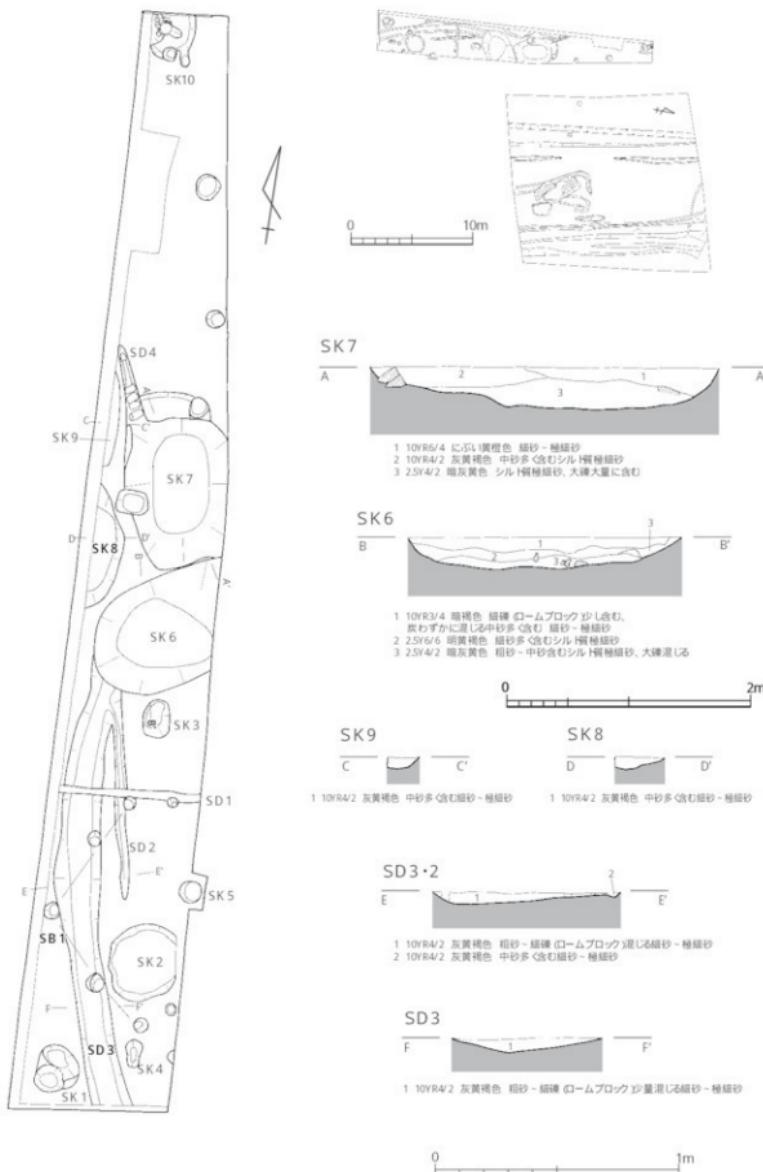
0 200m

遺跡周辺の地形（昭和61年）

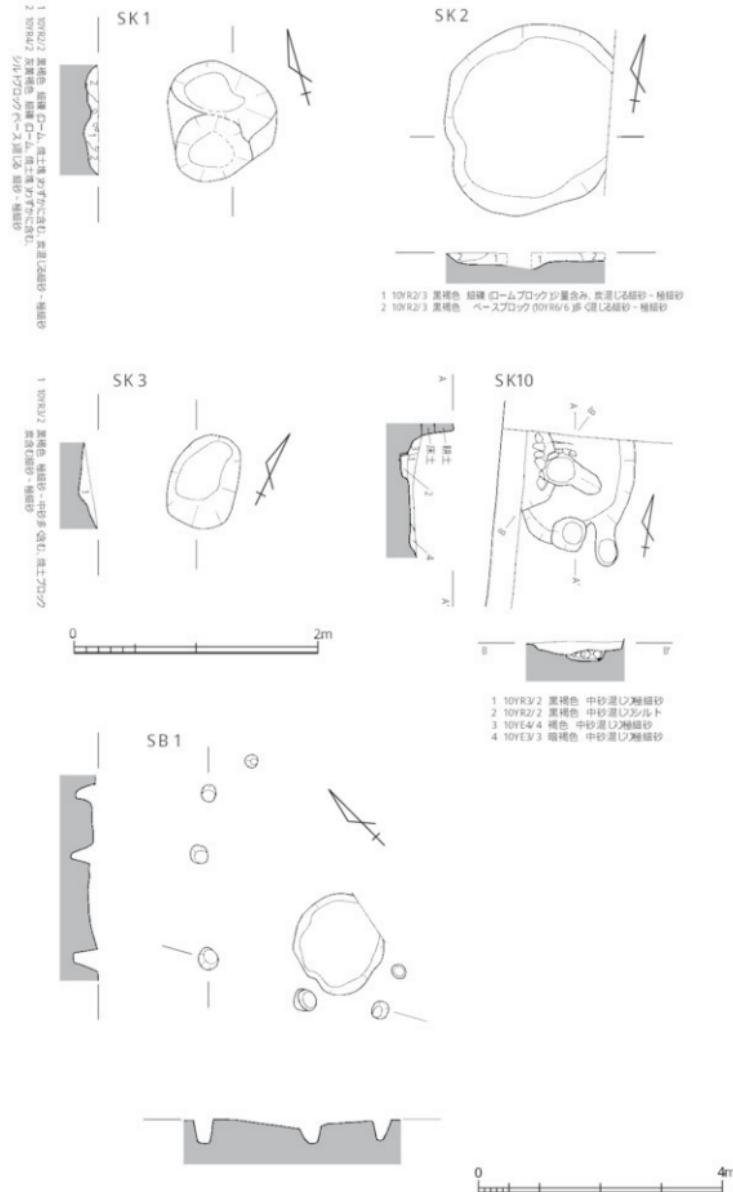


調査地区

図版 4

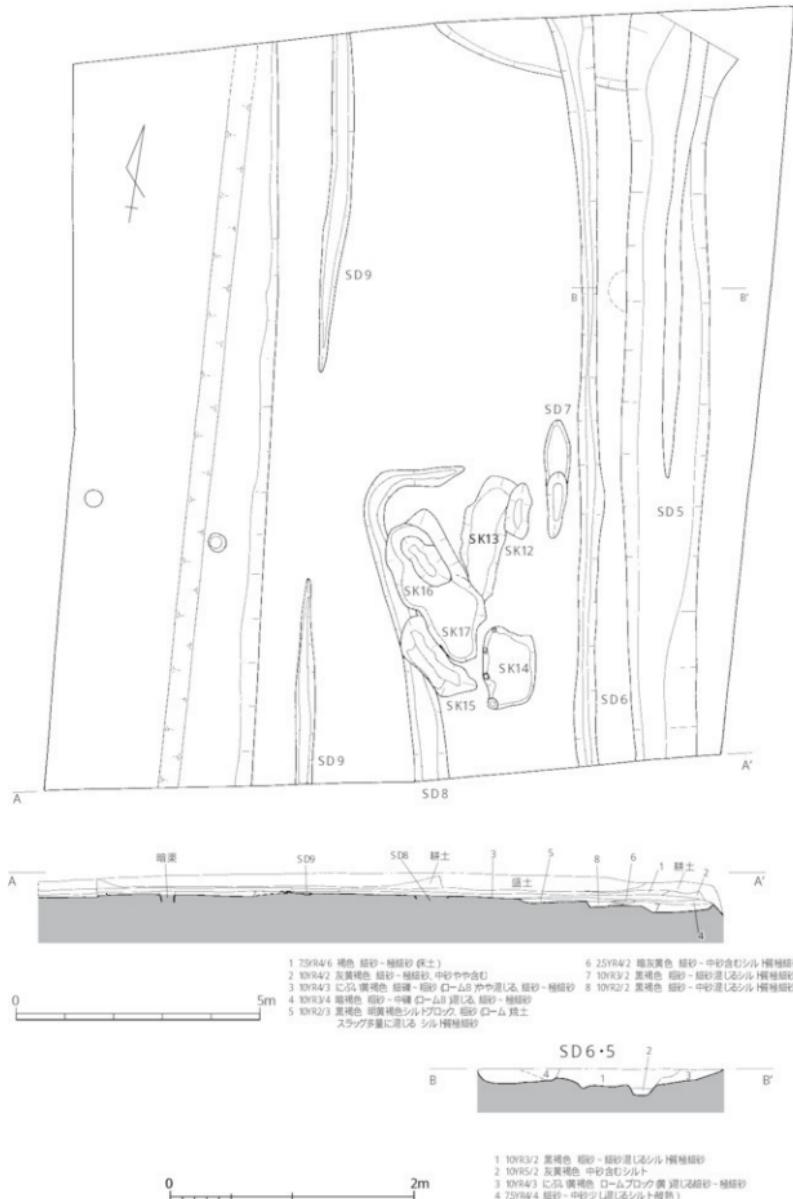


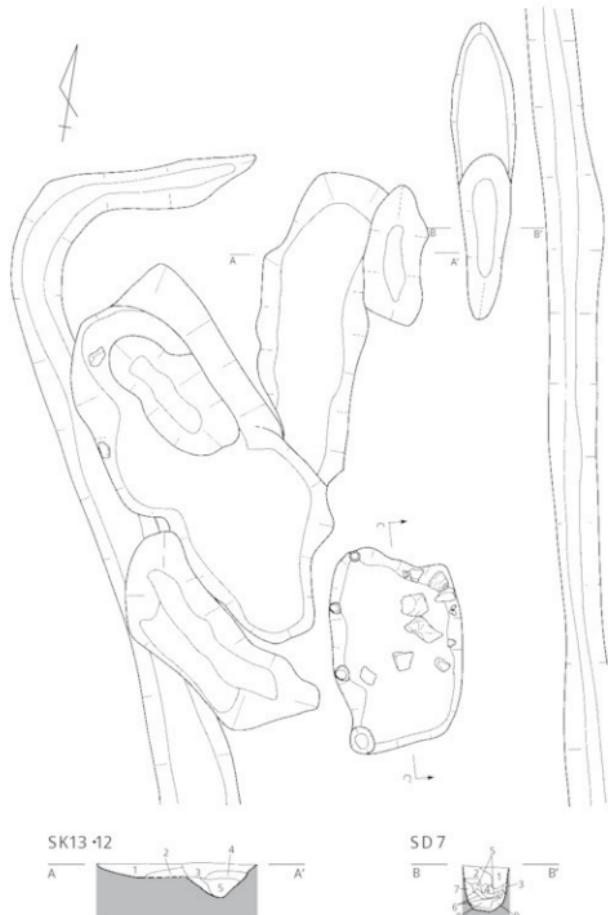
A区 遺構配置図



A区 遺構図

図版 6





SK13-12  
A —————— A'

SD 7  
B —————— B'

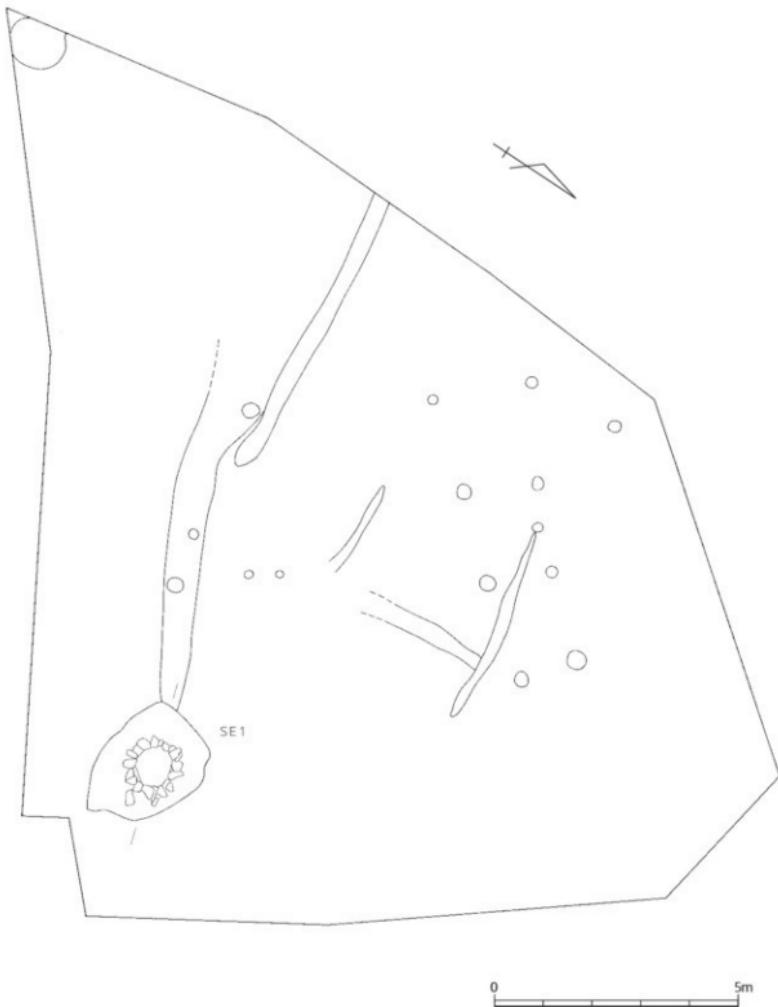
- 1 10YR3/2 黒褐色 粗土 頭疊 シラフ多(含む細砂・極細砂)
- 2 25Y6/4 にじみ 黄褐色 細砂 ローム 含むシルト・極細砂
- 3 10YR4/2 反対褐色 シルト
- 4 10YR4/2 反対褐色 シルト 粗土 頭疊 合む
- 5 25Y5/2 單灰青 粗砂・細砂 ローム シルト・極細砂

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト・粗砂・極細砂
- 2 25Y6/4 にじみ 黄褐色 細砂 含む極細砂
- 3 10YR4/2 反対褐色 中砂含むシルト・極細砂
- 4 25Y6/4 にじみ 黄褐色 シルト・ヘリクル - 極細砂
- 5 10YR5/2 單灰青 中砂含むシルト・極細砂
- 6 10Y5/6 黃褐色 シルト
- 7 25Y5/3 反対灰色 粗砂 - 中砂多(含むシルト・極細砂)
- 8 25Y5/2 反対灰色 シルト
- 9 10YR4/2 灰黄褐色 シルト

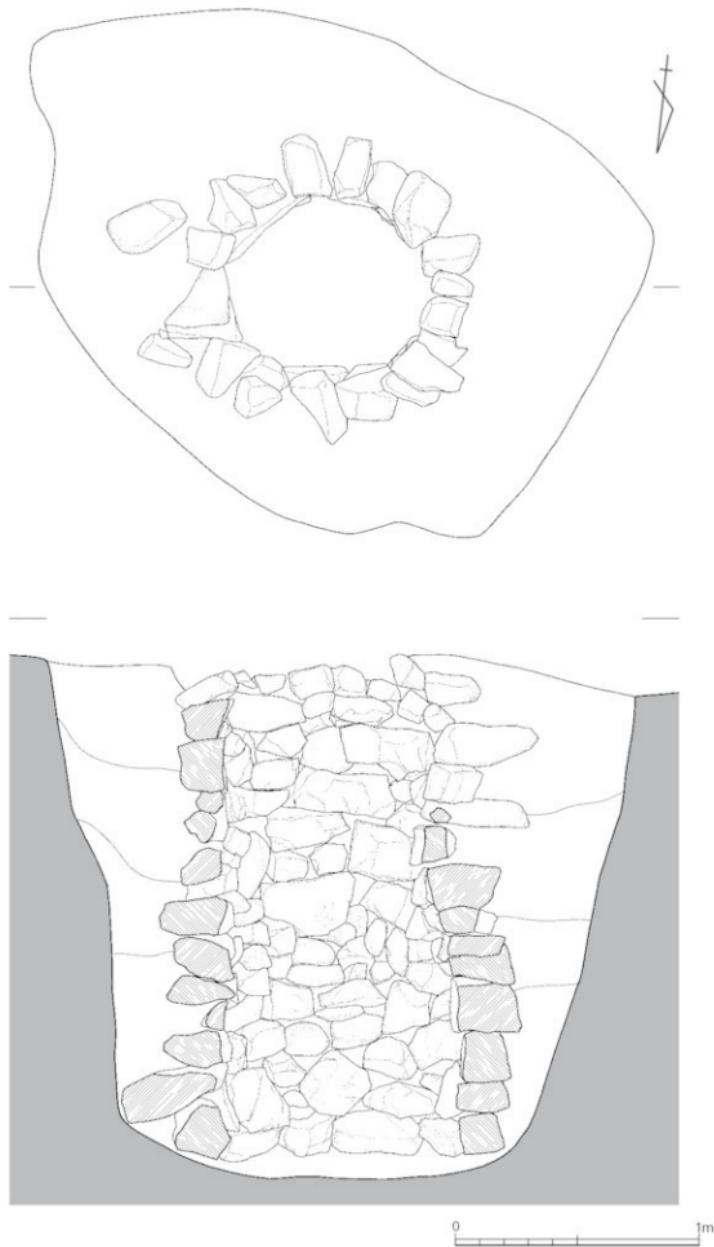
SK14  
C —————— C'

0 2m

B 区 遺構図



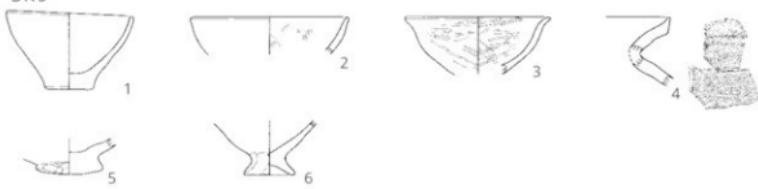
C 区 遺構配置図



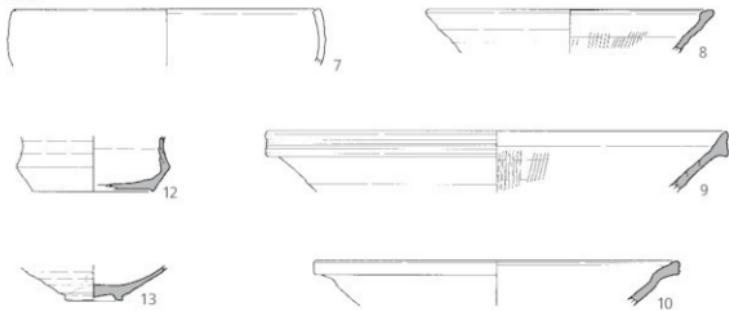
井戸 (SE1)

図版10

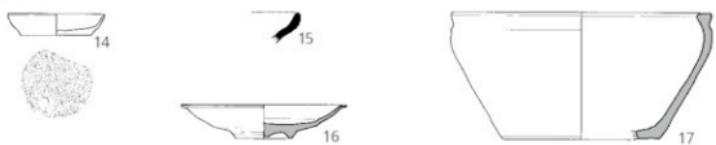
SK5



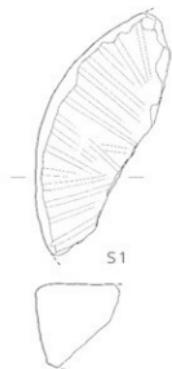
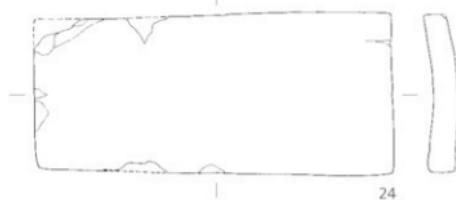
SK6



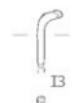
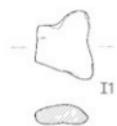
SK7



遺物 A区出土土器 1



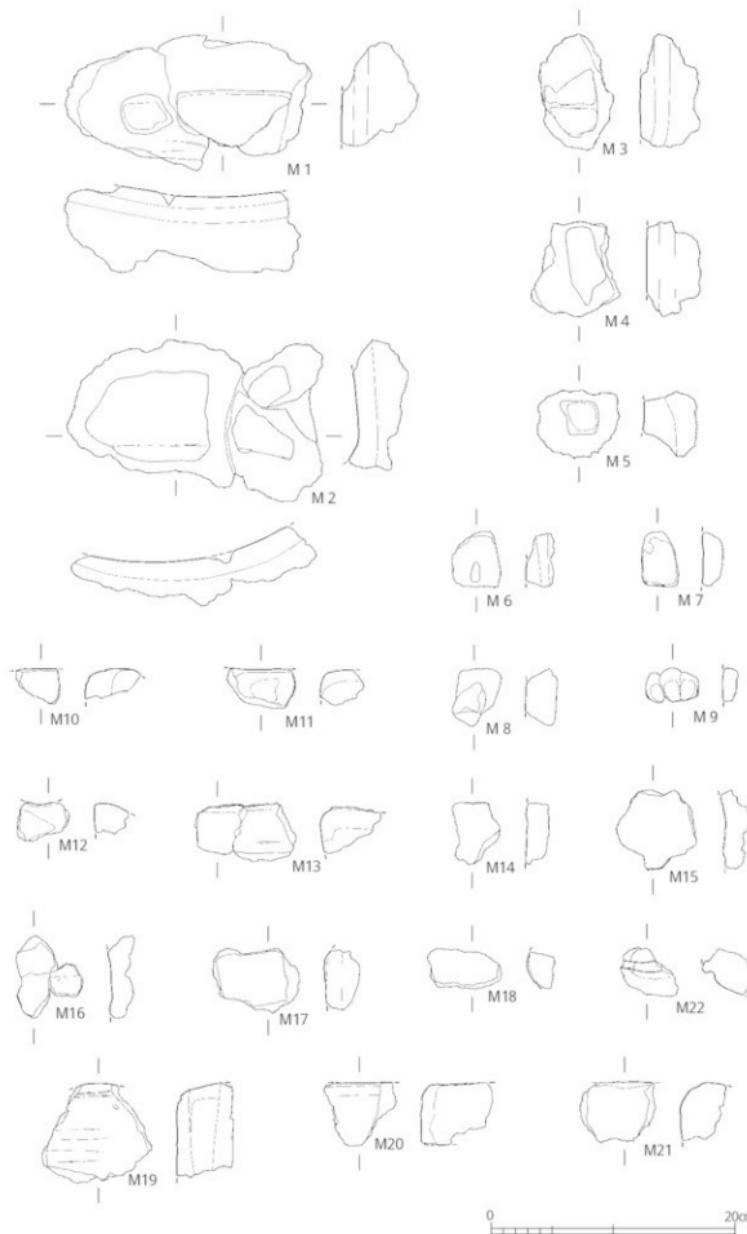
0 20cm



0 10cm

遺物 A区出土土器 2、石製品、鉄製品

図版12



遺物 A区出土鋳型 1